# 菅原東遺跡の竪穴建物・土坑群出土土器

## –古墳時代前～中期における菅原東遺跡の研究Ⅲ–

村瀬　陸

### Ⅰ．はじめに

本稿では、奈良市教育委員会が発掘調査した菅原東遺跡のうち、竪穴建物・土坑群を検出したHJ第169・173・182・184次調査出土土器について報告する。

HJ第169・173・182・184次調査は、近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に伴う発掘調査で、近接する４次調査が一括して概要報告された（奈良市教育委員会1990）。平城京の条坊復元では右京三条三坊一坪にあたり、一連の調査により菅原東遺跡の存在が認識された。

菅原東遺跡には、主に古墳時代前～中期初頭と後期の遺構があり、中期初頭～後期の間は一度断絶するようである。古墳時代前～中期初頭では、HJ第169・173・182・184次調査で検出された竪穴建物群とその周辺に広がる土坑群、HJ第257-3次調査等で検出された首長居館と目される方形区画溝と井戸群（奈良市教育委員会1994、村瀬2016）が中心部として機能し、周辺では基幹水路に想定される斜行溝などが確認されている（奈良県立橿原考古学研究所2011）。また、これらの東側にあたるHJ第229・443-7次調査では、谷状の落ち込みから埴輪編年Ⅱ期の円筒・形象埴輪が一定数出土しており（村瀬2018）、約500m南に位置する宝来山古墳との関係を想定できる。後期には、HJ第200次調査で埴輪窯６基を検出しており（奈良市教育委員会1992）、周辺調査でも包含層等から多くのⅤ群埴輪が出土していることから、拠点的埴輪生産地として機能したといえる。

このように、古墳造営や埴輪生産の実態に関わる重要遺跡であることはもちろん、『日本書紀』に登場する埴輪誕生説話や『続日本紀』にみる菅原土師氏との関連を検討することができる点においても、希少性の高い遺跡であると評価できる。

一方で、奈良市教育委員会が実施してきた調査成果は、重複する平城京跡に重点が置かれてきたこともあり、菅原東遺跡については一部の遺物報告を除いて遺構配置の提示等に留まらざるを得ない状況であった。そのため、遺構から出土する遺物の詳細が不明であり、より詳細な検討を進めることが困難であった。

そこで筆者は、菅原東遺跡の再評価を目的として、出土遺物の整理作業・調査を継続的に実施している（村瀬2016･2018･2019）。ここで報告する土器類についても、この一環の整理に基づくものである。

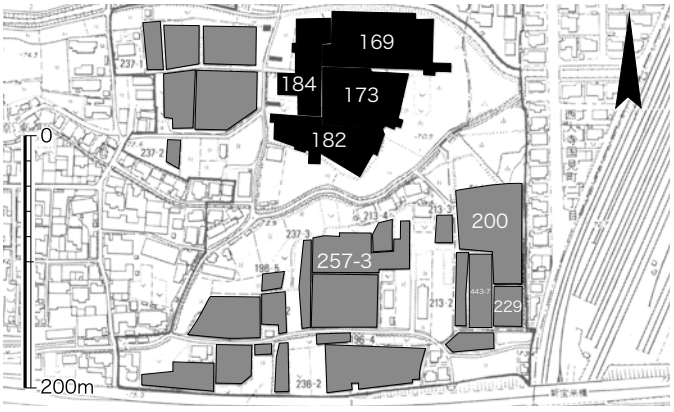



図１　HJ第169・173・182・184次位置図（1/6,000）

### Ⅱ．HJ第169・173・182・184次調査の概要

ここでは４次にわたる調査によって検出された古墳時代以前の遺構について概要を記す。遺構番号は概要報告書（奈良市教育委員会1990）に従う。

弥生時代の遺構には、方形周溝墓５基（SX01～05）がある。いずれも周溝を検出し、概ね大和第Ⅲ様式の弥生土器が少量出土している。

概報で示された古墳時代前期の遺構は、土坑44基(SK01～44)、井戸５基（SE01～05)、土器埋納遺構９基（SX06～14)、竪穴建物10棟（SB01～10)、溝４条(SD01～04)であり、後期の遺構は、溝１条(SD05)、掘立柱建物１棟（SB14)、土坑３基（SK45～47）である。ただし、溝や土坑の出土遺物は少量である場合が多く、後期の遺構に前期の遺物が混ざる場合が往々にしてあることから、一定数出土遺物のある遺構を中心に検討を進める必要がある。本稿では、時期判断の可能な遺構について、出土土器の報告を行う。

### Ⅲ．出土遺構・土器の報告

ここでは、HJ第169・173・182・184次調査のなかでも一定数の土器が出土した以下７つの遺構と出土土器について報告する。土器の詳細は観察表にまとめ、ここでは特徴を中心に記述する。

SB03（HJ173-SB03）　北で西に振れる竪穴建物で3.6×4.2mの方形を呈する。周囲には幅約0.2mの周壁溝がめぐる。小型丸底壺（１～７)、小型丸底鉢（８)、有段口縁鉢（９)、小型器台（10)、器台（11･12)、高杯（13～17)、壺（18)、甕（19～22）が出土した。

小型丸底壺は、いずれも比較的球形の体部に短めの口




図２　HJ 第 169・173・182・184 次　古墳時代以前の遺構配置図（1/200）

縁部が伴うものである。調整から大きく３区分でき、①外面ハケ調整のもの（１・２）、②外面ナデ調整、内面ケズリ調整のもの（３～５）、③内外面ナデ調整のもの（６・７）である。外面ナデ調整のものが目立ち、口縁部の接合後のナデ調整が粗いものが含まれる。

小型丸底鉢（８）は、ミガキ調整の精製品であるが、口縁部は縦方向のミガキであり、やや粗雑な印象をうけるものである。なお、９・10 も精製品であり、小型丸底壺が粗製品であるのに対して鉢・小型器台（８～ 10）はやや古相の傾向を示すものである。

器台（11・12）は、小型器台とは異なるもので、胎土も粗くナデ調整の粗製品である。11 は端部に炭化した部分がみられ、灯明用に使用された可能性がある。

高杯は、口径に対して杯部が浅く、口縁端部はやや外反する。ナデ調整であり胎土も粗く、粗製品である。脚部はケズリ主体のもの（16）とナデ主体のもの（17）があるが、脚高や形状は類似しており、系統差として認識できる。

壺（18）は、大型の複合口縁部であり搬入品の可能性がある。

甕は、布留甕で肩部にヨコハケが残るもの（19）、口縁部の形状がやや独特なもの（20）などがある。また、

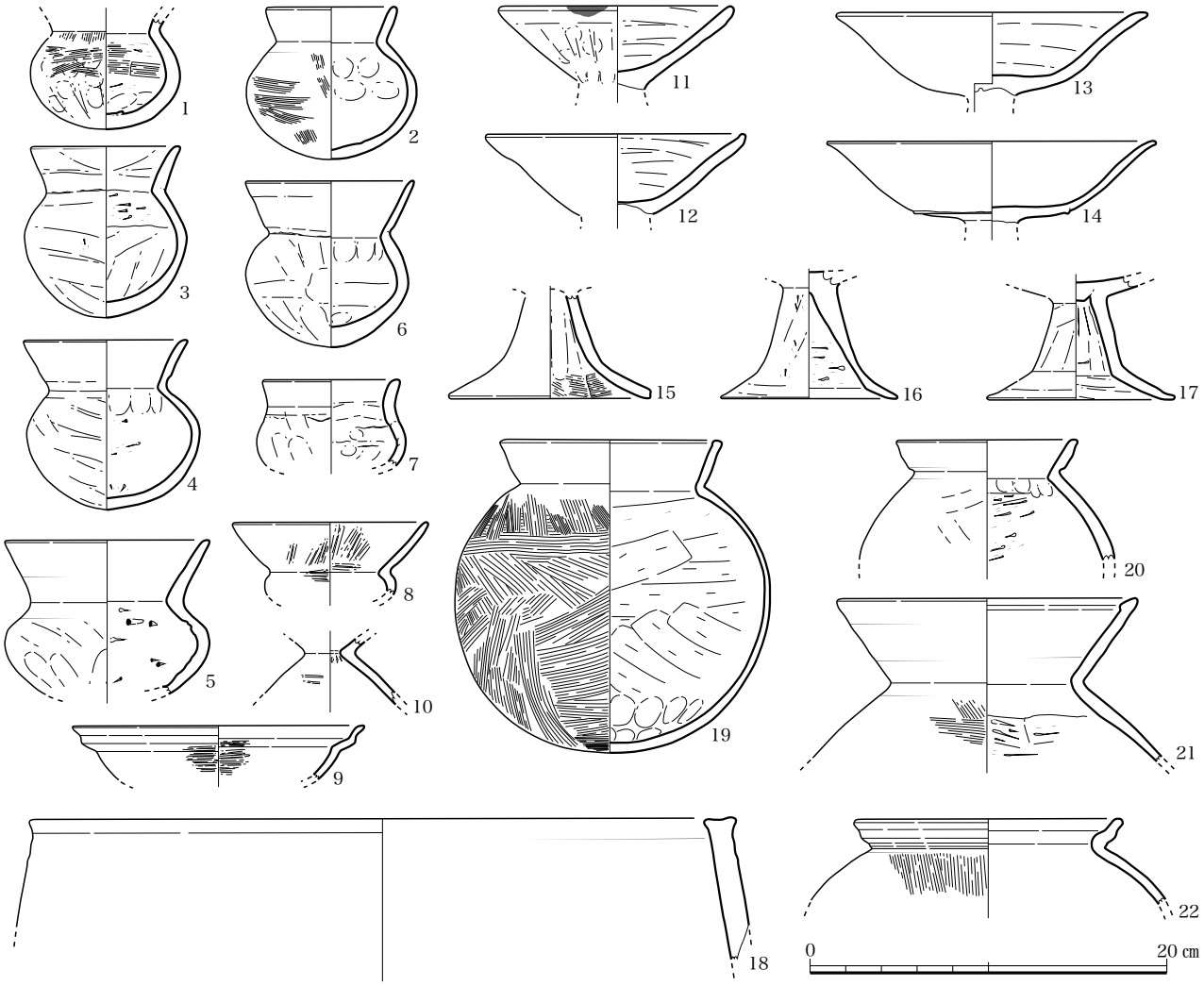



図３　SB03 出土土器（1/4）

S 字甕（22）は比較的器壁が厚いものである。

以上の特徴のなかでも、小型丸底壺や高杯等でナデ調整主体の粗製品が目立つこと、布留式前半段階には認められない器台（11・12）があることなどは注目できる。

SX06（HJ173-SK71）　SB01 内にある小穴で直径約 0.5m、深さ約 0.2m である。

出土土器は X 字状の小型器台（１）のみである。器壁は非常に薄いものの、内外面ともにハケ調整でミガキ調整はみられない。胎土はさほど粗くないが、ミガキ調整のものより粗雑化したものとみられる。

SB04（HJ173-SK25）　北で西に振れる竪穴建物で、約２m 四方であり、周壁溝はないが内部が約 0.1m 落ち込む。当初は土坑として調査されたが、SB03 等と方位を揃えることなどから竪穴建物として報告された。小型丸底鉢（１～４）、有段口縁鉢（５～８）、小型器台（９～ 12）、高杯（13・14）、壺（15 ～ 24）、甕（25 ～ 29）が出土した。

小型丸底鉢は、口縁部と体部の比率が同等のもの（１）と、口縁部が発達するもの（２～４）がある。いずれも調整が残るものはヨコミガキを密に施しているが、３の口縁部内面には、ヨコミガキ後に放射状暗文を施す。また、外面は底部をケズリ、体部もヨコミガキ下にケズリの痕跡が観察できる。

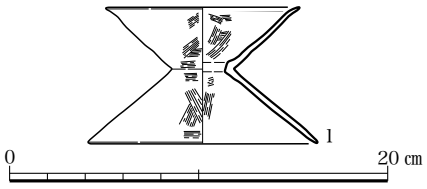



図４　SX06 出土土器（1/4）

有段口縁鉢の法量は様々であるが、５・８はヨコミガキを施す精製品である一方、７は胎土が粗く粗製品と考えられる。

小型器台は、脚部の透孔が２・３方向のものがあるが、いずれもヨコミガキを密に施す精製品である。11・12 は X 字状の小型器台であり、外面はいずれもヨコミガキであるが、内面は 11 がハケ、12 がミガキと異なる。

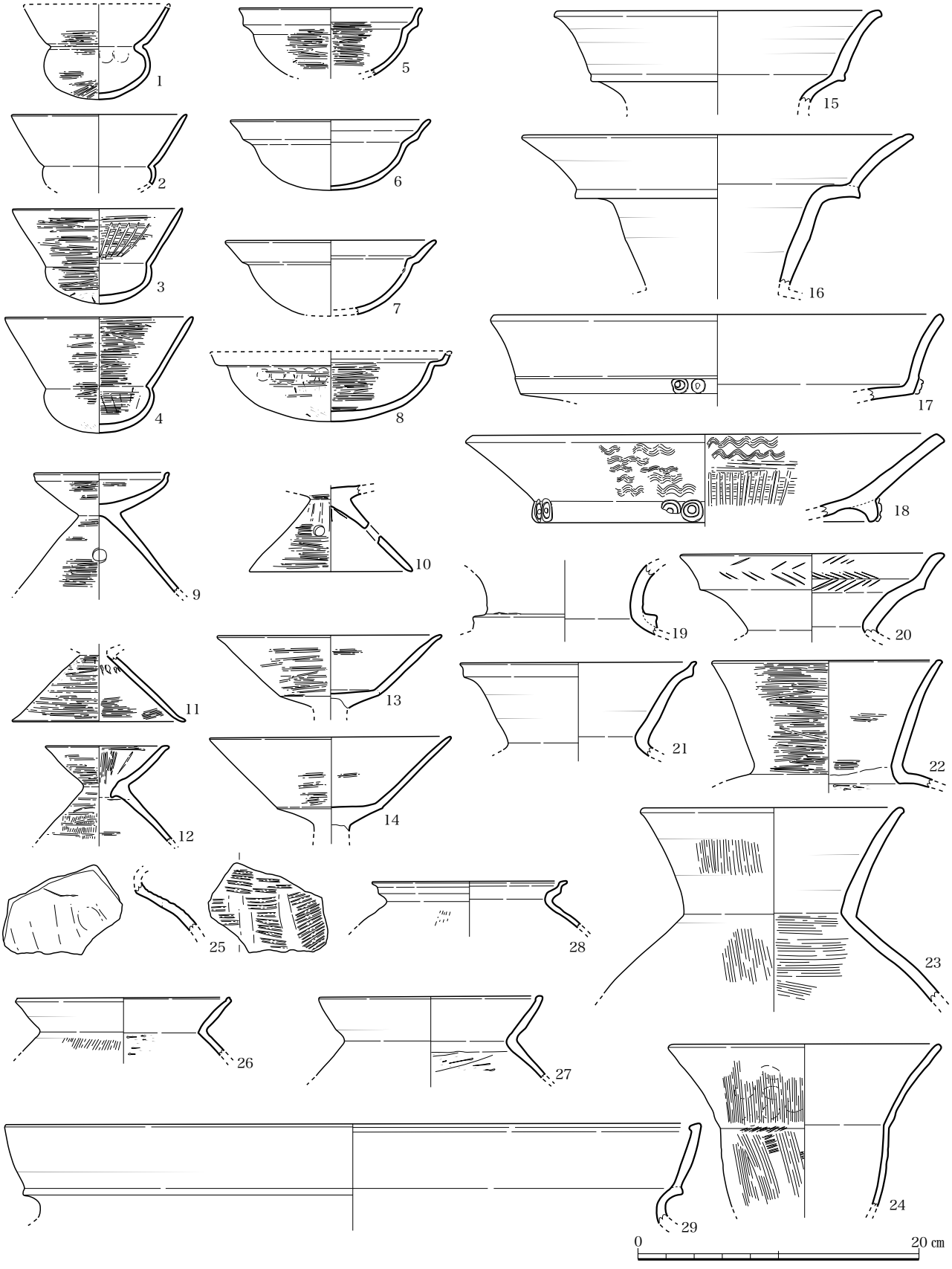



図 5　SB04 出土土器（1/4）

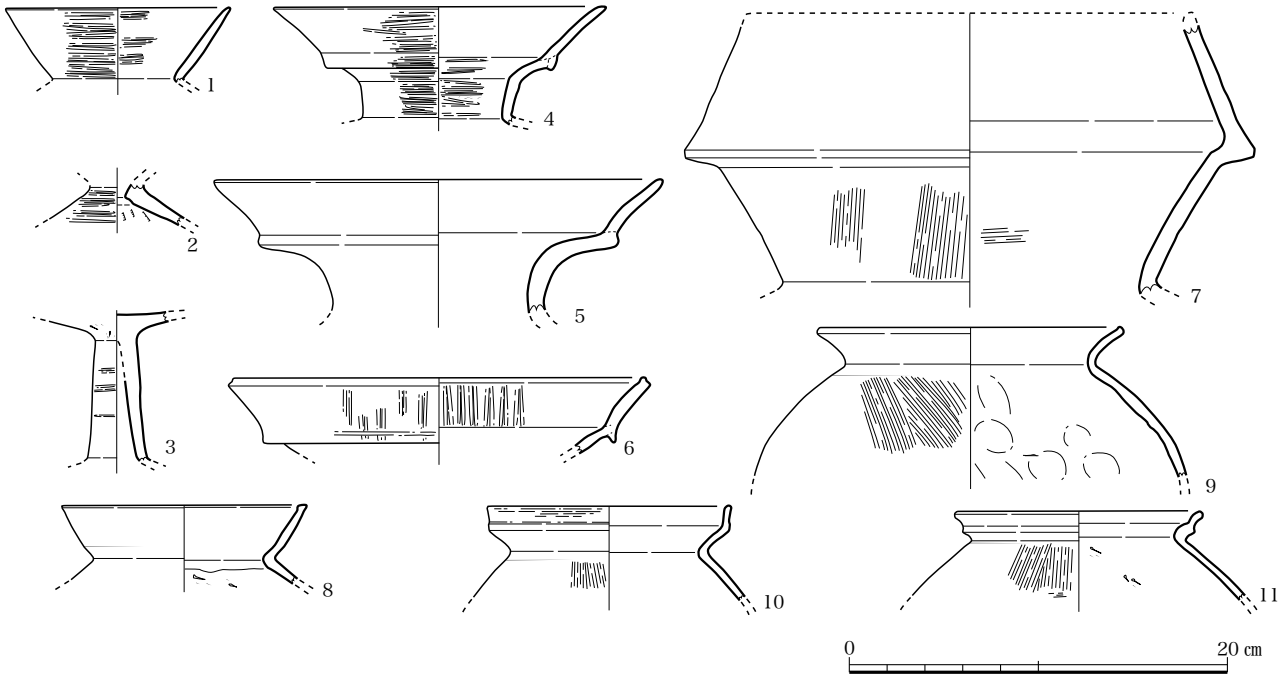



図６　SB07 出土土器（1/4）

高杯は、杯部が深く受部との稜線が明瞭である。いずれも内外面ともにヨコミガキを施す。

二重口縁壺（15・16）は、いずれも二次口縁部の傾きは異なるが同等の高さであり、16 はやや頸部が長く外側へひらく形状を呈する。加飾壺（17 ～ 19）はいずれも貼付竹管文を施すものであるが、17 は屈曲部に段差を削り出して貼り付けているのに対して、18 は口縁部を垂下させた部分に貼り付けている。18 は内外面に波状文を施す。また、内面にはヨコミガキ後、放射状暗文を施す。19 は頸部に突帯を施すことから加飾壺と考えられる。20 は柳ヶ坪型壺で、線刻は摩滅するが綾杉文が観察できる。21 は口縁部をやや立ち上げるもので、22 は口縁部の内外面にヨコミガキを密に施す。24 は特異な形状を呈し、外面もタタキ後ハケ調整である。

甕は、伝統的Ｖ様式系のもの（25）、26 も口縁部が直線的にのび、端部がわずかに肥厚する庄内系の系譜上にある特徴をもつ。27 は典型的な布留甕である。28 はＳ字甕、29 は山陰系の甕でいずれも外来系の特徴をもつ形態であるが、胎土は他の個体と大きく変わらない。

以上の特徴のなかでも、小型丸底鉢が口縁部の発達するものが主体であり、その製作技法が緻密であること、小型器台はＸ字状のものを含むが、ヨコミガキを比較的密に施すものであること、高杯は杯部と受部の稜が明瞭でヨコミガキを施すこと、加飾壺や精製の直口壺、タタキ甕を含むことなどは注目できる。

SB07（HJ182-SB03）　周壁溝はないが 3.7×3.0m の

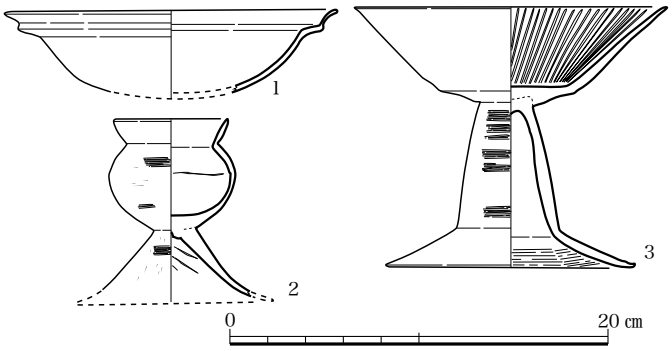



図７　SX09 出土土器（1/4）

方形を呈する竪穴建物で北で西に振れる。小型丸底鉢（１）、小型器台（２）、高杯（３）、壺（４～７）、甕（８～ 11）が出土した。

１～４はヨコミガキ調整を施す精製品であり、３の高杯は脚柱部が細身である。４は頸部がやや細く短い精製二重口縁壺である。６も二重口縁壺と考えられるが、口縁部内外面ともに縦方向のミガキを施し、外面は一部ヨコミガキを施す。７は大型の複合口縁壺で、ハケ調整を基調とする外来系土器である。

甕は口縁部が短く端部が肥厚し、体部が球形に発達するもの（９）や布留甕（８）を含み、吉備系（10）やＳ字甕（11）といった外来系土器を含む。

以上の特徴のなかでも、Ｘ字状小型器台を含みつつ、精製品が各器種に含まれること、外来系土器が甕・壺にみられることが注目できる。

SX09（HJ182-SK44）　SB08 内に位置する小穴で、

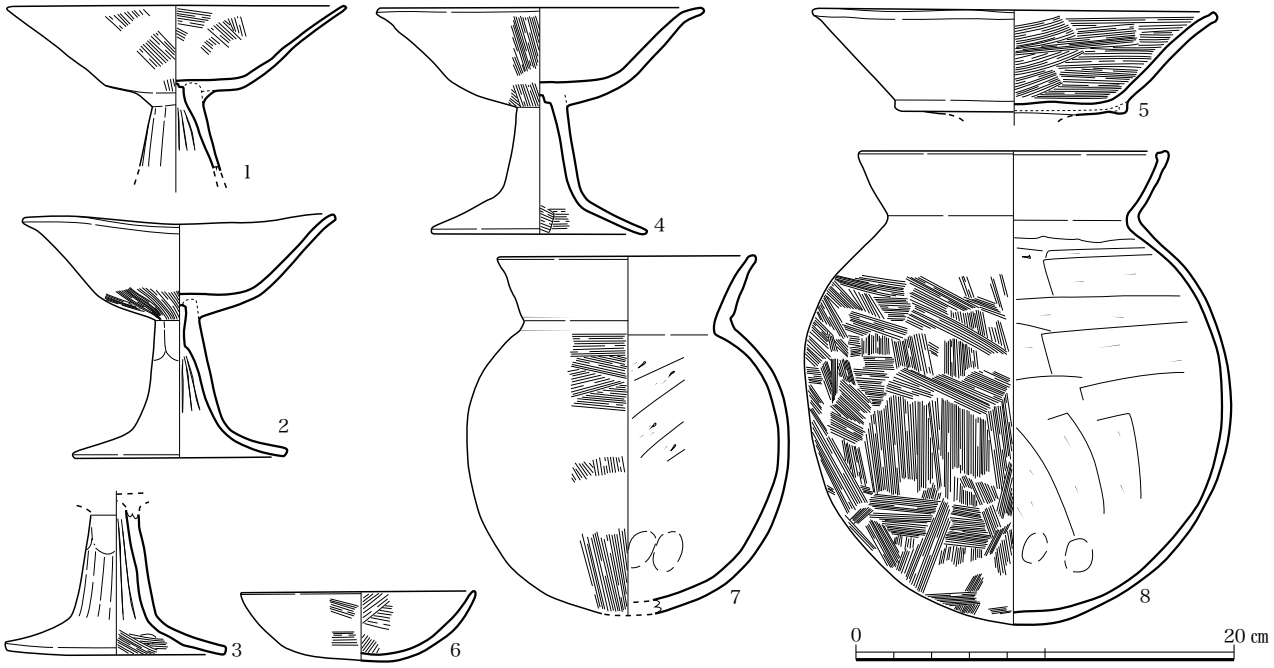



図７　SE05 出土土器（1/4）

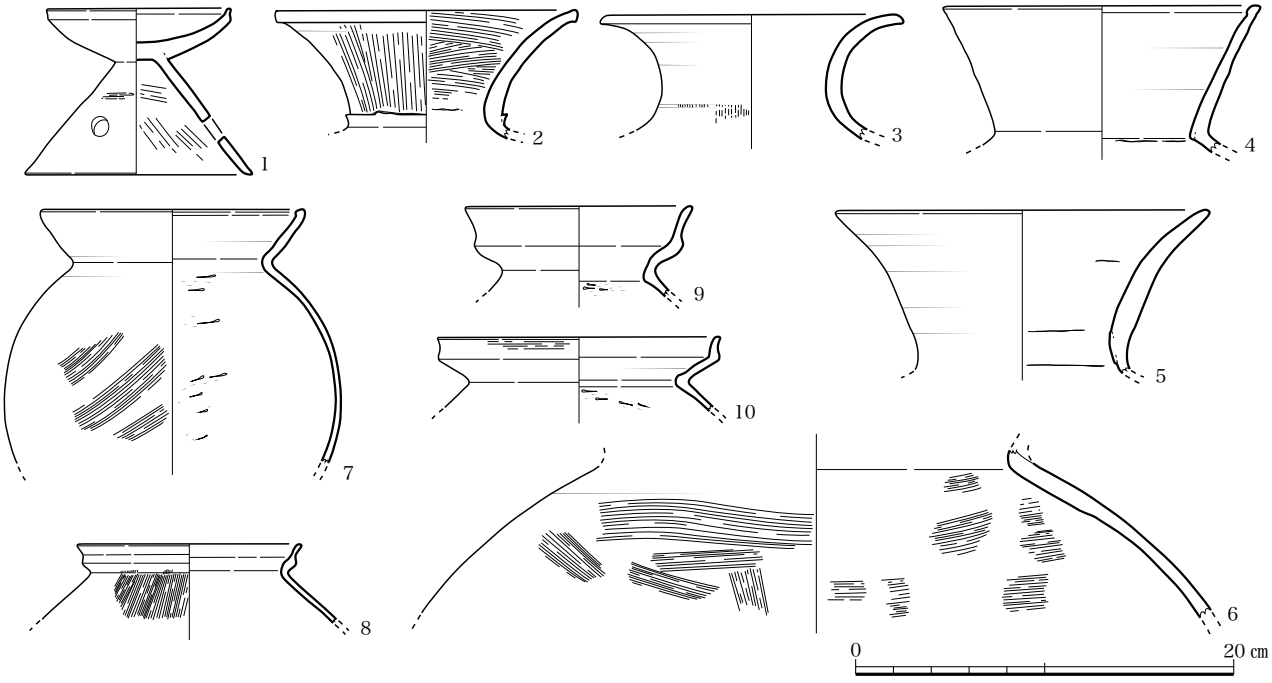



図８　SK23 出土土器（1/4）

直径約 0.6m、深さ約 0.6m である。有段口縁鉢（１）、台付小型丸底壺（２）、高杯（３）が出土した。

１は摩滅するが、いずれも精製品であると考えられ、２は台付であるが、口縁部が短めの小型丸底壺の形態を保つものである。高杯（３）は、脚部をヨコミガキするほか、杯部内面に放射状暗文を施す点が特徴である。杯部と受部、脚部の稜は明瞭であり、脚裾部に透孔はない。

SE05（HJ173-SK54）　直径約 1.1m の不整円形を呈し、深さ約 0.2m である。土器類とともに板・棒状の木材が出土していることから井戸として報告されている。高杯（１～５）、鉢（６）、甕（７・８）が出土した。

高杯は、いずれもハケ調整を基調とし、杯部が直線的にのびるもの（１）、端部が外反するもの（２・４）、杯部と受部に段をつける大型高杯（５）がある。５を除きいずれも杯部と受部や脚部の稜は不明瞭である。

鉢は、杯状の形態であり、内外面ともにハケ調整で、

表1　HJ173・182次調査出土土器観察表

| 調査次数 | 報告遺構番号 | 番号 | 器種 | 計測値 | | 色調（外面） | 胎土・材質 焼成 | 説明 | 調査時遺構番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| HJ173 | SB03 | 1 | 古式土師器 小型丸底壺 | 残高 | 6.2cm | 暗褐色 | やや密、1mm以下の砂粒含む。焼成良好。 | 口縁部が欠損する。外面は、頸部付近が縦方向のハケ、体部中位が横方向のハケ、下部がナデ調整で、成形時の指オサエにより表面がボコボコする。内面はケズリ後ハケ調整で、底部付近は指頭圧痕がある。器壁は比較的厚い。頸部で3/4遺存。 | SB03 |
| HJ173 | SB03 | 2 | 古式土師器 小型丸底壺 | 復元口径 器高 | 7.3cm 8.5cm | 淡橙色 | 粗、3mm以下の砂粒多く含む。焼成良好。 | 比較的球形の体部と短めの口縁部からなる。外面は頸部付近をヨコナデ、体部はハケ調整。内面は指オサエを観察できるが摩滅し調整不明瞭。胎土も粗く、頸部の屈曲等もゆるやかである粗製品。全体で1/2遺存。 | SB03 |
| HJ173 | SB03 | 3 | 古式土師器 小型丸底壺 | 口径 器高 | 8.4cm 9.6cm | 淡褐色（黒斑が主） | やや粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。 | 比較的球形の体部と短めの口縁部からなる。外面は口縁部をヨコナデ、体部はナデ調整だが、部分的に1次調整のケズリが下に観察できる。内面は口縁部をヨコナデ、体部上半はケズリ、下半はナデ調整。口縁部の接合はやや粗く、表面に接合痕が観察できる。完存。 | SB03 |
| HJ173 | SB03 | 4 | 古式土師器 小型丸底壺 | 口径 器高 | 9.2cm 9.5cm | 淡褐色 | 粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。 | 比較的球形の体部と短めの口縁部からなる。口縁部は器壁がやや薄い。外面は頸部付近までをヨコナデするが、頸部はやや強めで窪む。体部は全体がナデ調整。内面は口縁部をヨコナデ、体部はケズリ調整。完存。 | SB03 |
| HJ173 | SB03 | 5 | 古式土師器 小型丸底壺 | 復元口径 残高 | 11.9cm 8.6cm | 褐色 | 粗、5mm以下の砂粒多く含む。焼成良好。 | 底部が欠損するが、体部中位がやや張り、口縁部はやや長い。外面は口縁～頸部までヨコナデ､体部はナデ調整により胎土は粗いが器面は比較的整う。内面は口縁部は摩滅、体部はケズリ調整であるが、器面は粗い。全体で1/2遺存。 | SB03 |
| HJ173 | SB03 | 6 | 古式土師器 小型丸底壺 | 口径 器高 | 9.4cm 9.3cm | 淡赤褐色 | やや粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。 | 比較的球形の体部とやや短い口縁部からなり、器壁は厚く底部はとくに厚い。口縁部の貼り付けが甘く、接合痕が明瞭に観察できる。外面は口縁部をヨコナデ、体部をナデ調整するが、体部は調整時のアタリで面を持つ部分が複数ある。内面はナデ調整。完存。 | SB03 |
| HJ173 | SB03 | 7 | 古式土師器 小型丸底壺 | 復元口径 残高 | 7.7cm 4.8cm | 褐色 | 粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。 | 通有の小型丸底壺とは異なり、口縁～体部の屈曲は緩やかで手捏ねに近い形状を呈する。内外面ともにナデ調整であるが甘く、接合痕が明瞭に観察できる。口縁部で1/4遺存。 | SB03 |
| HJ173 | SB03 | 8 | 古式土師器 小型丸底鉢 | 復元口径 残高 | 11.0cm 4.1cm | 褐色 | やや密、1mm以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。 | 口縁部がやや発達し、体部高が比較的低い。口縁部内外面をやや斜め方向のミガキ、体部外面はヨコミガキ､内面は不明瞭。器壁はやや厚めであり､頸部の屈曲もやや鈍い。厚さやミガキ調整が典型的な口縁部の発達する小型丸底鉢とはやや異なり、いずれも粗雑になった印象をもつ。頸部で1/8遺存。 | SB03 |
| HJ173 | SB03 | 9 | 古式土師器 有段口縁鉢 | 復元口径 残高 | 16.3cm 3.0cm | 褐色 | やや密、1mm以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。 | 1次口縁～体部にかけてヨコミガキ、2次口縁部はヨコナデ。各屈曲部は比較的鋭く、器壁も薄手である。頸部で1/10遺存。 | SB03 |
| HJ173 | SB03 | 10 | 古式土師器 小型器台 | 残高 | 3.7cm | 橙色 | やや密、ほとんど砂粒なし。焼成良好。 | X字状の小型器台。外面にはわずかにヨコミガキの痕跡が観察でき、内面は摩滅するが脚上部に絞り目がある。屈曲部内面にはわずかに面をもつ。頸部で1/2遺存。 | SB03 |
| HJ173 | SB03 | 11 | 古式土師器 器台 | 口径 残高 | 13.2cm 4.7cm | 淡褐色 | 粗、5mm以下の砂粒含む。焼成良好。 | 器壁が厚く、ラッパ状にひらく杯部をもつ。内外面ともにナデ調整で、口縁端部外面はヨコナデし、1ヶ所に灯明皿のように炭化し黒い部分がある。杯部完存。 | SB03 |
| HJ173 | SB03 | 12 | 古式土師器 器台 | 口径 残高 | 14.6cm 4.6cm | 淡褐色 | 粗、5mm以下の砂粒含む。焼成やや不良。 | 器壁が厚く、ラッパ状にひらく杯部をもつ。外面は摩滅、内面はナデ調整。内面の口縁端部はナデによりやや窪む。杯部完存。 | SB03 |
| HJ173 | SB03 | 13 | 古式土師器 高杯 | 口径 残高 | 17.5cm 4.7cm | 淡橙色 | 粗、5mm以下の砂粒多く含む。焼成良好。 | 杯部は端部に向かって緩やかに外反し、杯部と受部の屈曲は不明瞭で稜はなく、比較的杯部は浅い。外面は摩滅し､内面はナデ調整。脚部との接合部分に棒状刺突痕がある。口縁部で1/2遺存。 | SB03 |
| HJ173 | SB03 | 14 | 古式土師器 高杯 | 復元口径 残高 | 18.4cm 4.6cm | 淡褐色 | 粗、3mm以下の砂粒含む。焼成やや不良。 | 杯部は端部に向かって緩やかに外反する。受部から杯部への接続部分はやや段をもつ。内外面ともに摩滅するが、わずかに摩滅していない部分でもハケ調整の痕跡はなく、ナデ調整の可能性がある。受部で1/2遺存。 | SB03 |
| HJ173 | SB03 | 15 | 古式土師器 高杯 | 底径 残高 | 11.3cm 5.8cm | 淡褐色 | 粗、3mm以下の砂粒含む。焼成やや不良。 | 脚部は稜をもたずラッパ状にひらき、端部には面をもつ。高杯としたが器台の可能性もある。外面は摩滅、内面は脚柱部をナデ、裾部にハケ調整を施す。脚部完存。 | SB03 |
| HJ173 | SB03 | 16 | 古式土師器 高杯 | 底径 残高 | 9.9cm 7.1cm | 褐色 | 粗、3mm以下の砂粒含む。焼成やや不良。 | 脚部は外面には稜をもたないが、内面は明瞭な稜をもつ。外面はケズリ後ナデ調整、内面は横方向のケズリ調整。脚端部完存。 | SB03 |
| HJ173 | SB03 | 17 | 古式土師器 高杯 | 底径 残高 | 10.5cm 6.9cm | 淡褐色 | 粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。 | 脚柱部はやや膨らみをもち、内外面とも明瞭な屈曲をもつ。内外面ともにナデ調整であるが、内面の脚柱部は1次調整にケズリを施す。杯部との接合は、脚部を絞りながら積み上げたのち、粘土を充填してから受部の成形を行う。脚端部で1/2遺存。 | SB03 |
| HJ173 | SB03 | 18 | 古式土師器 複合口縁壺 | 復元口径 残高 | 39.6cm 8.0cm | 暗褐色 | 粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。 | 口縁部は内傾し、端部は内外面ともに外側へひらいて、端面は窪みをもつ。内外面ともにヨコナデ。形状や胎土が在地のものと異なることから、搬入品と考えられる。 | SB03 |
| HJ173 | SB03 | 19 | 古式土師器 甕 | 口径 器高 | 11.8cm 17.6cm | 淡橙色 | 粗、2mm以下の砂粒含む。焼成良好。 | 典型的な布留甕であり、口縁端部は肥厚する。口縁部内外面はヨコナデ調整。体部外面はハケ調整で肩部にヨコハケを施す。内面はケズリ調整で、底部には指頭圧痕が観察できる。ほぼ完存。 | SB03 |
| HJ173 | SB03 | 20 | 古式土師器 甕 | 復元口径 残高 | 10.1cm 6.8cm | 褐色 | 粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。 | 口縁部はやや短めで厚く、頸部に強めのヨコナデを施すことでやや異質な形状を呈する。外面はナデ､内面は頸部直下は指オサエで､以下ケズリを施すが器壁は比較的厚い。口縁部で1/4遺存。 | SB03 |
| HJ173 | SB03 | 21 | 古式土師器 甕 | 復元口径 残高 | 16.9cm 9.2cm | 淡褐色 | 粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。 | 口縁部は比較的長くまっすぐのび、端部は肥厚する。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ、内面はケズリ調整であるが頸部付近には及ばない。口縁部で1/6遺存。 | SB03 |
| HJ173 | SB03 | 22 | 古式土師器 S字甕 | 復元口径 残高 | 14.8cm 4.8cm | 暗褐色 | 粗、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。 | 器壁は全体的に厚く、口縁部の各屈曲は緩いが、頸部はそれに比べてやや鋭い。口縁部は内外面ともにヨコナデ、体部外面はハケ、内面は摩滅。胎土はほかの在地のものと異なることから、搬入品と考えられる。口縁部で1/6遺存。 | SB03 |
| HJ173 | SX06 | 1 | 古式土師器 小型器台 | 口径 器高 | 10.2cm 7.2cm | 橙色 | やや密、ほとんど砂粒なし。焼成やや良好。 | X字状の小型器台。口縁端部はやや外反する。屈曲部は外面は鋭く、内面は面をもつ。比較的薄手で、内外面ともにハケ調整。全体で1/3遺存。 | SK71 |
| HJ173 | SB04 | 1 | 古式土師器 小型丸底鉢 | 残高 | 6.5cm | 橙色 | やや密、1mm以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。 | 口縁部がやや発達するもので、体部との比率はほぼ同率である。頸部は外面のヨコナデに起因して入り込むように窪む。外面はヨコミガキで、底部付近は一定方向に施す。内面は摩滅。頸部完存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 2 | 古式土師器 小型丸底鉢 | 復元口径 残高 | 12.5cm 5.0cm | 淡橙色 | やや密、ほとんど砂粒を含まない。焼成やや不良。 | 口縁部が発達し、体部の比率は口縁部より短い。口縁部は直線的にのび、頸部の屈曲は鋭い。内外面ともに摩滅。頸部で1/8遺存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 3 | 古式土師器 小型丸底鉢 | 復元口径 器高 | 12.1cm 5.8cm | 橙色 | やや密、1mm以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。 | 口縁部が発達し、体部の比率は口縁部より短い。口縁部は直線的にのび、頸部はやや鋭く屈曲するが、内面はあまりえぐりこまない。外面はヨコミガキで、体部には1次ケズリ調整がわずかに観察できる。外面下半はケズリ調整。内面は、口縁部でヨコミガキ後、放射状のミガキを施す。体部は摩滅し不明瞭。ほぼ完存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 4 | 古式土師器 小型丸底鉢 | 復元口径 器高 | 13.4cm 8.2cm | 橙色 | やや密、3mm以下の砂粒含む。焼成良好。 | 口縁部が発達し、体部の比率は口縁部より短い。口縁部は直線的にのび、頸部はやや鋭く屈曲し内面もえぐりこんで稜が明瞭である。内外面ともにヨコミガキで、外面下半はケズリ、体部内面はケズリ後、蜘蛛の巣状ハケを施してからヨコミガキを施す。頸部で1/2遺存。 | SK25 |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| HJ173 | SB04 | 5 | 古式土師器<br>有段口縁鉢 | 復元口径<br>残高 | 13.0cm<br>4.8cm | 淡褐色 | やや密、1mm 以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。 | 復元口径がやや短く、口径に対して深みのある形状を呈する。２次口縁部はヨコナデ、それ以外は内外面ともにヨコミガキで、体部外面には１次ケズリ調整がわずかに観察できる。各部の屈曲は鋭く、薄手の精製品である。口縁部で 1/8 遺存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 6 | 古式土師器<br>有段口縁鉢 | 復元口径<br>器高 | 14.1cm<br>5.0cm | 淡褐色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。 | 比較的薄手であるが、各部の屈曲はやや鈍い。内外面ともに摩滅。胎土や焼成もやや不良であり、精製品であるかは不明。口縁部で 1/8 遺存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 7 | 古式土師器<br>有段口縁鉢 | 復元口径<br>残高 | 15.0cm<br>5.3cm | 橙色 | 非常に粗、3mm 以下の砂粒多く含む。焼成やや不良。 | 各部の稜は比較的明瞭であるが、頸部の屈曲はやや緩い。内外面ともに摩滅。胎土が非常に粗く、粗製品と考えられる。口縁部で 1/8 遺存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 8 | 古式土師器<br>有段口縁鉢 | 残高 | 4.8cm | 赤褐色 | やや密、1mm 以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。 | 口径に対してやや浅い形状を呈する。口縁部は内外面ともにヨコナデ。体部は外面でケズリ後やや粗いヨコミガキ。内面は密なヨコミガキで底部はハケ調整。頸部で 1/6 遺存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 9 | 古式土師器<br>小型器台 | 復元口径<br>残高 | 9.6cm<br>8.6cm | 淡橙色 | やや粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。 | 通有の小型器台の精製品。口縁端部はやや立ち上がり、ヨコナデによりやや外反する。内外面ともに比較的密なヨコミガキを施すが摩滅し一部不明瞭。脚部に２方向の透孔あり。脚裾部完存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 10 | 古式土師器<br>小型器台 | 復元底径<br>残高 | 11.6cm<br>6.1cm | 赤褐色 | やや密、2mm 以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。 | 外面は杯部と脚部の透孔付近より下部をヨコミガキし、透孔より上部は縦方向のナデ調整でミガキは観察できない。内面は摩滅するが、絞り目が確認できる。透孔は３方向に穿孔される。脚上部完存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 11 | 古式土師器<br>小型器台 | 底径<br>残高 | 12.3cm<br>4.7cm | 橙色 | やや密、2mm 以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。 | X 字状の小型器台。外面は縦方向のケズリ後、密なヨコミガキ。内面は脚裾部をハケ調整し、上部は絞り目が観察できる。脚部は直線的にのびるが、端部はやや反る。脚部完存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 12 | 古式土師器<br>小型器台 | 復元口径<br>残高 | 8.8cm<br>6.8cm | 淡橙色 | やや密、1mm 以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。 | X 字状の小型器台。杯部はやや膨らみをもち、端部はわずがに外反する。外面は杯部をヨコミガキ、脚部は縦方向のハケ後やや粗いヨコミガキ。内面は口縁端部をヨコミガキし、杯部は縦方向のミガキ、脚部はわずかにヨコミガキが観察できる。脚部で 1/2 遺存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 13 | 古式土師器<br>高杯 | 復元口径<br>残高 | 16.0cm<br>5.2cm | 橙色 | やや粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。 | 杯部が比較的深く、受部との稜線もやや緩くなるが観察できる。杯部は直線的にのび端部がわずかに外反する。内外面ともにヨコミガキであるが摩滅し不明瞭。口縁部で 1/2 遺存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 14 | 古式土師器<br>高杯 | 口径<br>残高 | 17.2cm<br>6.7cm | 橙色 | やや密、1mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。 | 杯部が比較的深く、受部との間にわずかな段をもつ。杯部は直線的にのびる。内外面ともにヨコミガキであるが摩滅し不明瞭。杯部完存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 15 | 古式土師器<br>二重口縁壺 | 復元口径<br>残高 | 23.0cm<br>6.5cm | 淡黄褐色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。 | １次口縁部はやや斜め方向に立ち上がり、そこから２次口縁を貼り付ける。２次口縁はやや外反し、端部でやや強く反る。内外面ともにヨコナデ。１次口縁部付近で 1/8 遺存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 16 | 古式土師器<br>二重口縁壺 | 復元口径<br>残高 | 27.7cm<br>10.7cm | 暗褐色 | 粗、7mm 以下の砂粒・角閃石含む。焼成良好。 | 頸部から上方へはややひらいてのび、１次口縁部はほぼ水平に外側へ屈曲する。そこから２次口縁をややひらき気味で貼り付ける。内外面ともにヨコナデ。胎土からみて生駒西麓産か。口縁部で 1/4 遺存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 17 | 古式土師器<br>加飾壺 | 復元口径<br>残高 | 31.8cm<br>6.8cm | 暗褐色 | 粗、3mm 以下の砂粒・角閃石含む。焼成やや不良。 | 口縁部は緩やかに外反し、屈曲部は削り出しで段を設け、２個１組の貼り付け竹管文を施す。残存片で１ヶ所しかみられず間隔は不明。胎土からみて生駒西麓産か。口縁部で 1/8 遺存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 18 | 古式土師器<br>加飾壺 | 復元口径<br>残高 | 33.1cm<br>6.2cm | 淡褐色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。 | 口縁部はややひらき気味で、粘土を貼り付けて垂下口縁となる。この部分に２個１組の貼り付け竹管文を施し、間隔は広めである。外面は４条１組の櫛描波状文を５段施す。内面には口縁端部に４条１組の櫛描波状文を２段施し、以下はヨコミガキのち放射状にミガキを施す。櫛描波状文下にはミガキは及ばない。口縁部で 1/4 遺存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 19 | 古式土師器<br>壺 | 残高 | 5.0cm | 淡褐色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。 | 頸部に突帯を貼り付けることから加飾壺の可能性がある。内外面ともに摩滅。頸部で 1/4 遺存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 20 | 古式土師器<br>柳ヶ坪型壺 | 復元口径<br>残高 | 18.8cm<br>5.7cm | 淡橙色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成不良。 | 焼成不良で摩滅が激しいが、柳ヶ坪型壺特有の綾杉文が口縁部の内外面に施される。器壁はやや厚め。口縁部で 1/4 遺存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 21 | 古式土師器<br>壺 | 復元口径<br>残高 | 16.8cm<br>6.7cm | 暗褐色 | 粗、5mm 以下の砂粒・角閃石含む。焼成良好。 | 口縁端部はやや強めのヨコナデにより窪み、斜め方向に立ち上がる形状を呈する。内外面ともにヨコナデ。胎土から生駒西麓産か。口縁部で 1/3 遺存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 22 | 古式土師器<br>壺 | 復元口径<br>残高 | 16.4cm<br>9.0cm | 橙色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。 | 口縁部がハの字にひらく直口壺で、内外面ともに密なヨコミガキを施す精製品。頸部直下から横方向のケズリ調整。頸部で 1/2 遺存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 23 | 古式土師器<br>壺 | 復元口径<br>残高 | 18.2cm<br>13.9cm | 淡褐色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや良好。 | 頸部の屈曲は比較的鋭く、口縁部は緩やかに外反する。外面は全体をタテハケし、口縁端部と頸部付近にはヨコナデを施す。内面は口縁部がヨコナデ、体部が横方向のハケ調整。頸部完存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 24 | 古式土師器<br>壺 | 復元口径<br>残高 | 19.5cm<br>11.6cm | 淡褐色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。 | ハの字にひらく口縁部とそこから肩がはらず窄まる体部をもつ。外面は口縁部をハケ調整、体部はやや右上がりのタタキのちタテハケ調整。口縁部は指オサエによりボコボコしている。内面は摩滅。頸部で 1/6 遺存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 25 | 古式土師器<br>甕 | 高さ<br>幅 | 6.4cm<br>8.5cm | 橙色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。 | 伝統的Ｖ様式系甕の肩部付近の破片。外面はタタキのち部分的にナデ。内面ナデ。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 26 | 古式土師器<br>甕 | 復元口径<br>残高 | 15.1cm<br>4.2cm | 淡褐色 | 粗、2mm 以下の砂粒含む。焼成良好。 | 頸部の屈曲は比較的鋭く、口縁部は直線的にのび、頸部・端部付近をヨコナデすることで中位の器壁はやや厚い。端部は小さく肥厚し、端面はヨコナデにより窪む。外面は肩部タテハケ、内面は頸部直下からケズリ調整。口縁部で 1/6 遺存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 27 | 古式土師器<br>甕 | 復元口径<br>残高 | 16.0cm<br>5.9cm | 淡橙色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。 | 口縁部はわずかに内湾し端部は肥厚する。頸部はやや強めのヨコナデにより窪む。外面は摩滅するが、内面は頸部直下にヨコナデを施し、その下方からケズリ調整。口縁部で 1/5 遺存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 28 | 古式土師器<br>S 字甕 | 復元口径<br>残高 | 13.9cm<br>3.3cm | 淡褐色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。 | S 字甕で口縁部の屈曲は比較的鋭く、頸部は緩やかに屈曲する。外面肩部にはわずかに斜め方向のハケ調整が残る。口縁部で 1/6 遺存。 | SK25 |
| HJ173 | SB04 | 29 | 古式土師器<br>甕 | 復元口径<br>残高 | 49.6cm<br>7.1cm | 淡褐色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。 | 短めの複合口縁部をもち、端部は肥厚し端面には面をもつ。頸部は緩やかに屈曲する。形状から山陰系であるが、胎土はいずれであるか判断がつかない。口縁部で 1/12 遺存。 | SK25 |
| HJ182 | SB07 | 1 | 古式土師器<br>小型丸底鉢 | 復元口径<br>残高 | 11.9cm<br>3.9cm | 橙色 | やや密、2mm 以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。 | 体部が欠損するが、小型丸底鉢と考えられる。口縁部は比較的発達し、内外面ともに密なヨコミガキを施す。口縁部で 1/8 遺存。 | SB03 |
| HJ182 | SB07 | 2 | 古式土師器<br>小型器台 | 残高 | 2.1cm | 橙色 | やや密、1mm 以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。 | X 字状の小型器台。外面は密なヨコミガキ、内面はハケの痕跡がわずかに残り、脚上部には絞り目が観察できる。脚上部完存。 | SB03 |
| HJ182 | SB07 | 3 | 古式土師器<br>高杯 | 残高 | 7.9cm | 橙色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。 | 比較的脚柱部が細長く、脚裾部の屈曲も鋭く稜線が明瞭である。受部外面は本来ミガキまたはナデであるが１次調整のケズリが観察できる。脚部は摩滅するがヨコミガキ、内面は不明瞭である。脚柱部完存。 | SB03 |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| HJ182 | SB07 | 4 | 古式土師器<br>二重口縁壺 | 復元口径<br>残高 | 17.6cm<br>6.2cm | 橙色 | やや密、5mm 以下の砂粒含む。焼成良好。 | やや外傾する頸部をもち、２次口縁は比較的ひらく形状を呈する。内外面ともにヨコミガキを施す精製品で、内面は外面に比べやや粗雑なミガキである。頸部完存。 | SB03 |
| HJ182 | SB07 | 5 | 古式土師器<br>二重口縁壺 | 復元口径<br>残高 | 23.7cm<br>7.1cm | 淡褐色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。 | 頸部は強く屈曲し、１次口縁部は比較的水平となり２次口縁を貼り付ける。内外面ともに摩滅するが、頸部外面には光沢があり、本来はミガキを施したものと考えられる。１次口縁部で 1/6 遺存。 | SB03 |
| HJ182 | SB07 | 6 | 古式土師器<br>二重口縁壺 | 復元口径<br>残高 | 21.6cm<br>4.0cm | 橙色 | やや粗、2mm 以下の砂粒含む。焼成良好。 | 斜め方向に１次口縁がのび、垂下口縁を作り出す。２次口縁端部は端部内面と端面をヨコナデすることで、ややつまみ上げたような形状を呈する。２次口縁部は内外面ともに縦方向のミガキで、外面はわずかに２次ヨコミガキを観察できる。口縁部で 1/8 遺存。 | SB03 |
| HJ182 | SB07 | 7 | 古式土師器<br>複合口縁壺 | 残高 | 13.9cm | 橙色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。 | くの字に屈曲する複合口縁壺で、頸部外面タテハケ、内面にはわずかにヨコハケが観察できる。口縁屈曲部で 1/4 遺存。 | SB03 |
| HJ182 | SB07 | 8 | 古式土師器<br>甕 | 復元口径<br>残高 | 12.9cm<br>4.2cm | 褐色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。 | やや内湾する口縁部で端部は肥厚する。外面は摩滅するが､内面は頸部直下をヨコナデ、その下方からケズリ調整。口縁部で 1/4 遺存。 | SB03 |
| HJ182 | SB07 | 9 | 古式土師器<br>甕 | 復元口径<br>残高 | 16.0cm<br>8.0cm | 橙色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。 | 体部が張り、短めの口縁部をもつ。頸部の屈曲は緩やかで、口縁端部はわずかに立ち上がる。体部外面はハケ調整、内面はナデ。頸部で 1/8 遺存。 | SB03 |
| HJ182 | SB07 | 10 | 古式土師器<br>甕 | 復元口径<br>残高 | 12.9cm<br>5.0cm | 褐色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。 | 短めの複合口縁部をもち、外面には櫛描文を施す。肩部にはタテハケ、内面は摩滅。口縁部からみて吉備系と考えられるが、胎土は在地のものと同様である。口縁部で 1/8 遺存。 | SB03 |
| HJ182 | SB07 | 11 | 古式土師器<br>S 字甕 | 復元口径<br>残高 | 13.0cm<br>4.7cm | 暗赤褐色 | やや粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。 | S 字甕で、屈曲は比較的鋭い。肩部外面はタテハケで、残存する最下部に２次ヨコハケが観察できる。内面には部分的にケズリ調整が認められる。口縁部で 1/4 遺存。 | SB03 |
| HJ182 | SX09 | 1 | 古式土師器<br>有段口縁鉢 | 口径<br>残高 | 17.4cm<br>4.6cm | 橙色 | やや密、1mm 以下の砂粒含む。焼成不良。 | 焼成不良により表面は激しく摩滅し、器壁が薄くなっている。調整は内外面ともに不明瞭。口縁部完存。 | SK44 |
| HJ182 | SX09 | 2 | 古式土師器<br>台付小型丸底壺 | 口径<br>残高 | 6.0cm<br>9.8cm | 橙色 | やや密、1mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。 | 口縁部が短めの小型丸底壺にハの字にひらく脚部が取り付く。表面は摩滅するが、丸底壺部分で横方向のケズリのちヨコミガキ、脚部で縦方向のケズリのちヨコミガキが観察できる。脚部内面には斜め方向に絞り目がある。口縁部で完存。 | SK44 |
| HJ182 | SX09 | 3 | 古式土師器<br>高杯 | 口径<br>器高 | 16.5cm<br>13.7cm | 赤褐色 | やや密、ほとんど砂粒なし。焼成良好。 | 深めの杯部をもち、受部との稜線や脚部の稜線も比較的明瞭。杯部外面は摩滅するが、内面には放射状のミガキが観察できる。脚部外面はヨコミガキ、内面は不明瞭であるが裾部にハケ調整がみられる。ほぼ完存。 | SK44 |
| HJ173 | SE05 | 1 | 古式土師器<br>高杯 | 口径<br>残高 | 17.9cm<br>8.5cm | 淡褐色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。 | 比較的ひらく杯部をもち、杯部と受部の稜線は緩やかであるが確認できる。杯部は内外面ともにハケ、脚部は外面ナデ、内面は不明瞭であるが絞り目が観察できる。杯部完存。 | SK54 |
| HJ173 | SE05 | 2 | 古式土師器<br>高杯 | 口径<br>器高 | 17.3cm<br>12.8cm | 淡黄褐色 | 粗、5mm 以下の砂粒含む。焼成良好。 | 杯部と受部の稜線は緩やかで不明瞭。内外面ともに摩滅するが受部外面はハケ調整。脚部内面には絞り目が観察できる。この絞り目より上部は細長く筒状となる。脚裾部も緩やかに屈曲する。ほぼ完存。 | SK54 |
| HJ173 | SE05 | 3 | 古式土師器<br>高杯 | 底径<br>残高 | 11.4cm<br>7.6cm | 淡褐色 | やや粗、1mm 以下の砂粒含む。焼成良好。 | 脚裾部にかけての屈曲は比較的緩やかで稜線は不明瞭。外面はナデ、内面は脚裾部でハケ調整、脚柱部に絞り目が観察できる。脚部完存。 | SK54 |
| HJ173 | SE05 | 4 | 古式土師器<br>高杯 | 口径<br>器高 | 17.0cm<br>12.0cm | 褐色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。 | 杯部と受部の稜線は不明瞭で、口縁端部が外反する。脚部も屈曲は緩やか。杯部外面は縦方向のハケ調整、脚裾部内面はハケ調整。ほぼ完存。 | SK54 |
| HJ173 | SE05 | 5 | 古式土師器<br>高杯 | 口径<br>残高 | 21.2cm<br>5.5cm | 淡褐色 | やや粗、2mm 以下の砂粒少量含む。焼成やや不良。 | 受部成形後、杯部を貼り付け、接合部に粘土を貼り足して稜をつける大型高杯。外面は摩滅、内面は横方向のハケ調整。杯部完存。 | SK54 |
| HJ173 | SE05 | 6 | 古式土師器<br>杯 | 口径<br>器高 | 12.3cm<br>3.7cm | 淡褐色 | 粗、2mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。 | 内外面ともにハケ調整で胎土は比較的もろい。完存。 | SK54 |
| HJ173 | SE05 | 7 | 古式土師器<br>甕 | 口径<br>器高 | 13.5cm<br>19.0cm | 淡褐色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。 | 口縁部はあまりひらかず、端部も肥厚しない。外面は体部上半は横方向のハケ、下半は縦方向のハケ。内面はケズリ調整。外面全体に２次焼成のススが付着する。全体で 1/4 遺存。 | SK54 |
| HJ173 | SE05 | 8 | 古式土師器<br>甕 | 口径<br>器高 | 15.8cm<br>25.0cm | 淡褐色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。 | 口縁部はやや内湾し、端部は肥厚する。全体的に薄手であり、体部外面はハケ調整、内面は頸部直下はヨコナデ、以下ケズリ調整。ほぼ完存。 | SK54 |
| HJ173 | SK23 | 1 | 古式土師器<br>小型器台 | 口径<br>器高 | 9.7cm<br>8.8cm | 淡褐色 | やや密、ほとんど砂粒なし。焼成やや不良。 | 通有の小型器台で口縁端部はわずかに立ち上がる。杯部内外面は摩滅。脚部外面は摩滅するがヨコミガキ、内面はやや粗いハケ調整。３方向の透孔あり。ほぼ完存。 | SK36 |
| HJ173 | SK23 | 2 | 古式土師器<br>壺 | 復元口径<br>残高 | 16.0cm<br>5.8cm | 淡褐色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。 | 口縁部はゆるやかに外反し、頸部には低く突帯を貼り付ける。内外面ともにハケ調整。口縁部で 1/8 遺存。 | SK36 |
| HJ173 | SK23 | 3 | 古式土師器<br>壺 | 復元口径<br>残高 | 15.4cm<br>6.6cm | 褐色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。 | 強く外反し、口縁部と体部の境目は不明瞭である。外面はヨコナデであるが、頸部付近以下では１次ハケ調整を施す。内面は摩滅。口縁部で 1/3 遺存。 | SK36 |
| HJ173 | SK23 | 4 | 古式土師器<br>壺 | 復元口径<br>残高 | 16.2cm<br>7.8cm | 淡黄褐色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。 | 口縁部は直線的にひらき、端部は肥厚する。外面は摩滅し、内面は口縁部をヨコナデ。頸部の屈曲は比較的鋭く、頸部直下に接合痕が観察できる。口縁部で 1/3 遺存。 | SK36 |
| HJ173 | SK23 | 5 | 古式土師器<br>壺 | 復元口径<br>残高 | 19.6cm<br>8.6cm | 橙色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。 | 口縁部は緩やかに外反する。内外面ともにヨコナデ。内面の頸部付近には粘土を横方向に貼り足している。口縁部で 1/5 遺存。 | SK36 |
| HJ173 | SK23 | 6 | 古式土師器<br>壺 | 残高 | 8.9cm | 橙色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。 | 比較的大型の壺肩部片で口縁部の剥離痕が一部で残る。外面は頸部付近をヨコナデ、その直下に横方向にやや波打つヨコハケを施し、以下不定方向のハケ調整。内面は横方向を中心とするハケ調整。頸部で 1/6 遺存。 | SK36 |
| HJ173 | SK23 | 7 | 古式土師器<br>甕 | 復元口径<br>残高 | 14.0cm<br>13.4cm | 淡褐色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。 | わずかに内湾気味の口縁部で端部は肥厚する。口縁部は内外面ともにヨコナデ。体部外面はハケ、内面は頸部直下はヨコナデし、以下ケズリ調整。口縁部で 1/2 遺存。 | SK36 |
| HJ173 | SK23 | 8 | 古式土師器<br>S 字甕 | 復元口径<br>残高 | 11.8cm<br>4.2cm | 淡褐色 | やや粗、2mm 以下の砂粒少量含む。焼成やや不良。 | S 字甕で、口縁端部は非常に薄い。肩部外面は斜め方向のハケ調整、内面は摩滅。口縁部で 1/4 遺存。 | SK36 |
| HJ173 | SK23 | 9 | 古式土師器<br>甕 | 復元口径<br>残高 | 12.0cm<br>4.8cm | 橙色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。 | 複合口縁をもち、２次口縁部はやや長めに斜め方向へ立ち上がる。１次口縁部の稜線はやや緩やか。摩滅し調整は不明瞭であるが、肩部内面は横方向のケズリ調整。口縁部で 1/4 遺存。 | SK36 |
| HJ173 | SK23 | 10 | 古式土師器<br>甕 | 復元口径<br>残高 | 15.0cm<br>3.9cm | 淡褐色 | 粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。 | 複合口縁をもち、２次口縁部は短く立ち上がる。２次口縁部の外面には櫛描文に起因するとみられる条線がわずかに残る。頸部内面にはやや面をもち、肩部内面はケズリ調整。形態から吉備系とみられるが、胎土は在地のものと考えられる。口縁部で 1/2 遺存。 | SK36 |

胎土も粗く粗製品である。

甕は８が布留甕であるが､肩部ヨコハケはみられない。７は口縁部が肥厚せず、典型的な布留甕の形態を逸脱しつつあるものである。

以上の特徴のなかでも、高杯がハケ調整を基調とし大型高杯を含むこと、杯状の鉢を含むこと、布留甕の肩部ヨコハケが消失していることが注目できる。

SK23（HJ173-SK36） 直径約 2.4m の不整円形を呈し、深さ約 0.4m である。小型器台（１)、壺（２～６)、甕（７～ 10）が出土した。

１は、外面にわずかにヨコミガキが残るが、内面はハケ調整のものである。

壺は、いずれもハケ調整を主とし、様々な口縁部形状のものがある。

甕は典型的な布留甕（７）のほか、S 字甕（８）や吉備系（10）のものを含む。

ここでは、壺や甕が主体であり、精製の小型器台１点を含むものの、その他精製器種や高杯を含まないことが特徴である。

## Ⅳ．菅原東遺跡出土土器の編年

菅原東遺跡では、重複する遺構が少なく層位による土器年代の前後関係を追うことが困難である｡したがって、編年を行う場合は一括資料に基づいて型式学的検討を行う必要がある。

菅原東遺跡出土土器については、本稿以前に概要報告されたものに筆者が加筆修正を加えたもの（村瀬 2016）と、奈良県立橿原考古学研究所（以下、橿考研）の調査出土土器（橿考研 2011）がある。ほかに、奈良市教育委員会が調査した方形区画溝 SX22 周辺の溝資料があるが、これについては橿考研調査溝と繋がると思われるため、本稿をもって、概ね菅原東遺跡の主要遺構についての土器様相は報告されたといえる。以下では、各遺構出土土器をもとに、器種ごとに型式分類を行い、その様相を総合的に検討することで編年を行う。

ⅰ）各種土器の分類

小型丸底土器　特徴をもとに分類すると、①高さの比率が口縁部＜体部でヨコミガキを施すもの、②口縁部＝体部でヨコミガキを施すもの、③口縁部＞体部でヨコミガキを施すもの、④口縁部≧体部で一部縦方向のミガキを施すもの、⑤口縁部＜体部で外面ハケ調整のもの、⑥口縁部＜体部で外面ナデ調整のもの、に分けられる。

小型器台　分類すると、①中実で外面ヨコミガキを施すもの、②Ｘ字状を呈し外面ヨコミガキを施すもの、③Ｘ字状を呈し、外面ハケ調整のもの、④中実で器壁が厚くナデ調整の粗製品であるもの、に分けられる。

有段口縁鉢　分類すると、①内外面ともにヨコミガキを施すもの、②ミガキを施さない粗製品であるもの、に分けられる。

高杯　分類すると、①杯部と受部の稜が明瞭で外面にヨコミガキを施し、杯部内面に放射状暗文を施すもの、②杯部と受部の稜が明瞭で杯部内外面ヨコミガキであるもの、③杯部と受部の稜が明瞭で杯部内外面ハケ調整であるもの、④杯部と受部の稜が不明瞭で杯部内外面ハケ調整のもの、⑤杯部と受部の接合部に段差をつけ杯部内外面ハケ調整のもの、に分けられる。

杯　分類すると、①外面にケズリ調整を施すもの、②内外面ハケ調整であるもの、に分けられる。

二重口縁壺　分類すると、①口縁部にミガキ後波状文を施し、垂下口縁部に竹管文を加飾するもの、②口縁部外面に竹管文を加飾するもの、③加飾はなく、内外面にヨコミガキを施すもの、③ミガキ調整がなく頸部が屈曲するもの､④ミガキ調整がなく頸部が直線的にのびるもの、に分けられる。

直口壺　分類すると、①ヨコミガキ調整を施すもの、②ハケ・ナデ調整を施すもの、に分けられる。

甕（外来系を除く） 分類すると、①外面タタキであるもの､②口縁部が直線的にのびて端部がわずかに肥厚し、外面ハケ・内面ケズリ調整のもの、③口縁部が内湾気味にのびて端部が肥厚し、外面ハケ（肩部ヨコハケあり)・内面ケズリ調整のもの、④口縁部が内湾気味にのびて端部が肥厚し、外面ハケ（肩部ヨコハケなし)・内面ケズリ調整のもの、⑤口縁部が肥厚せず、外面ハケ・内面ケズリ調整のもの、に分けられる。

ⅱ）菅原東遺跡の土器様相

様相１　SX09 が該当する。小型丸底土器は脚付のものであるが、口縁部が短くヨコミガキを施すものである。有段口縁鉢は調整不明瞭であるがそれを含む。高杯は杯部内面に放射状暗文を施すのが特徴であり、庄内系高杯の系譜にあるものである。

大和地域における有段口縁鉢の出現は、寺澤編年布留１式以降であるが、放射状暗文を施す高杯は布留１式後半以降減少傾向となる。出土量が少ないため、厳密な位置づけは困難であるが、布留１式後半以前に相当する。

様相２　SB07・SB04・SK23 が該当する。小型丸底鉢は口縁部が発達するものが主体であるが、製作技法はケズリのちヨコミガキを密に施す丁寧なものである。有段口縁鉢は、SB04 で粗製品を含むが精製品が主体である。

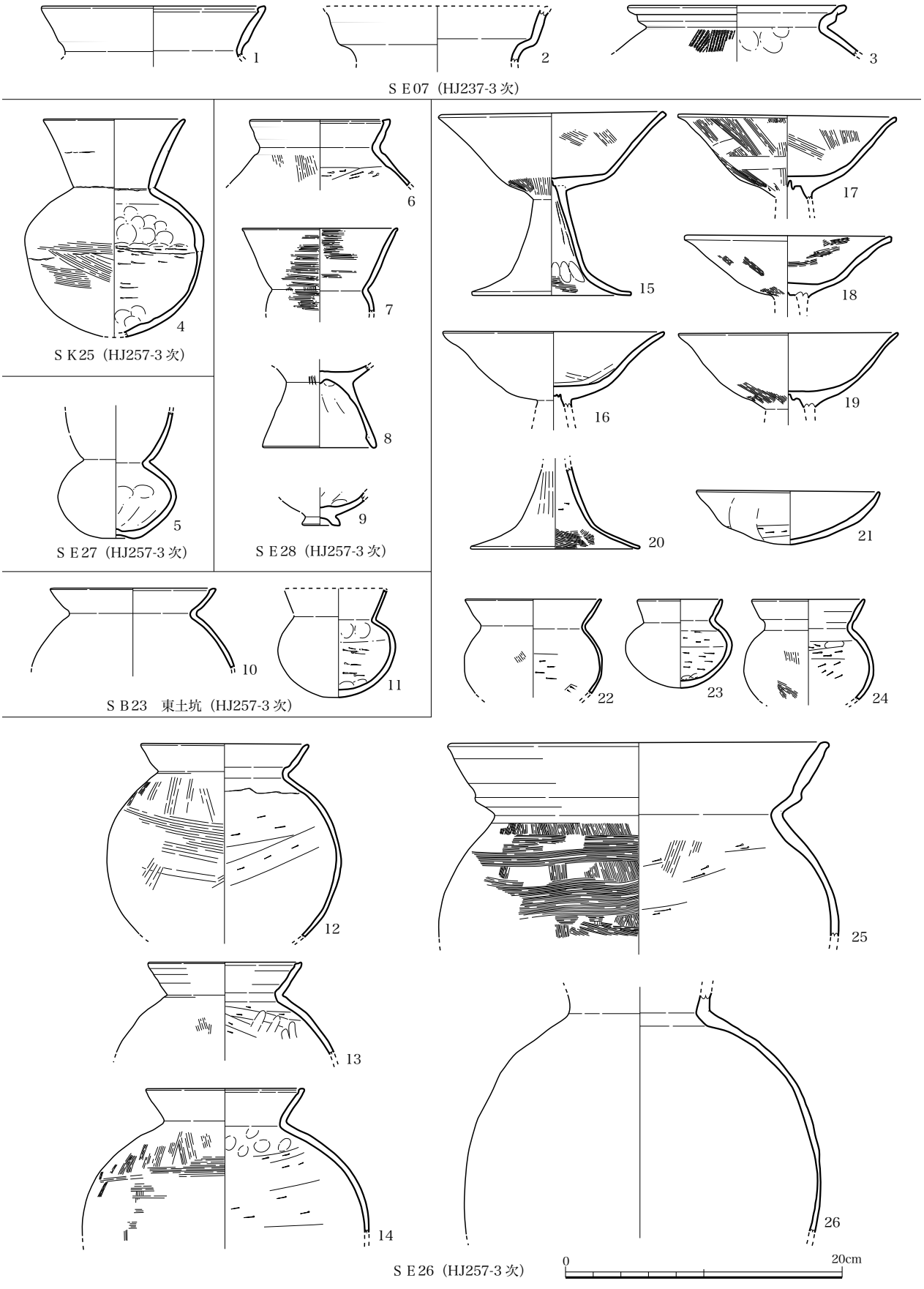



図９　菅原東遺跡出土土器（1/4）（土器番号は（村瀬 2016）の観察表に対応）

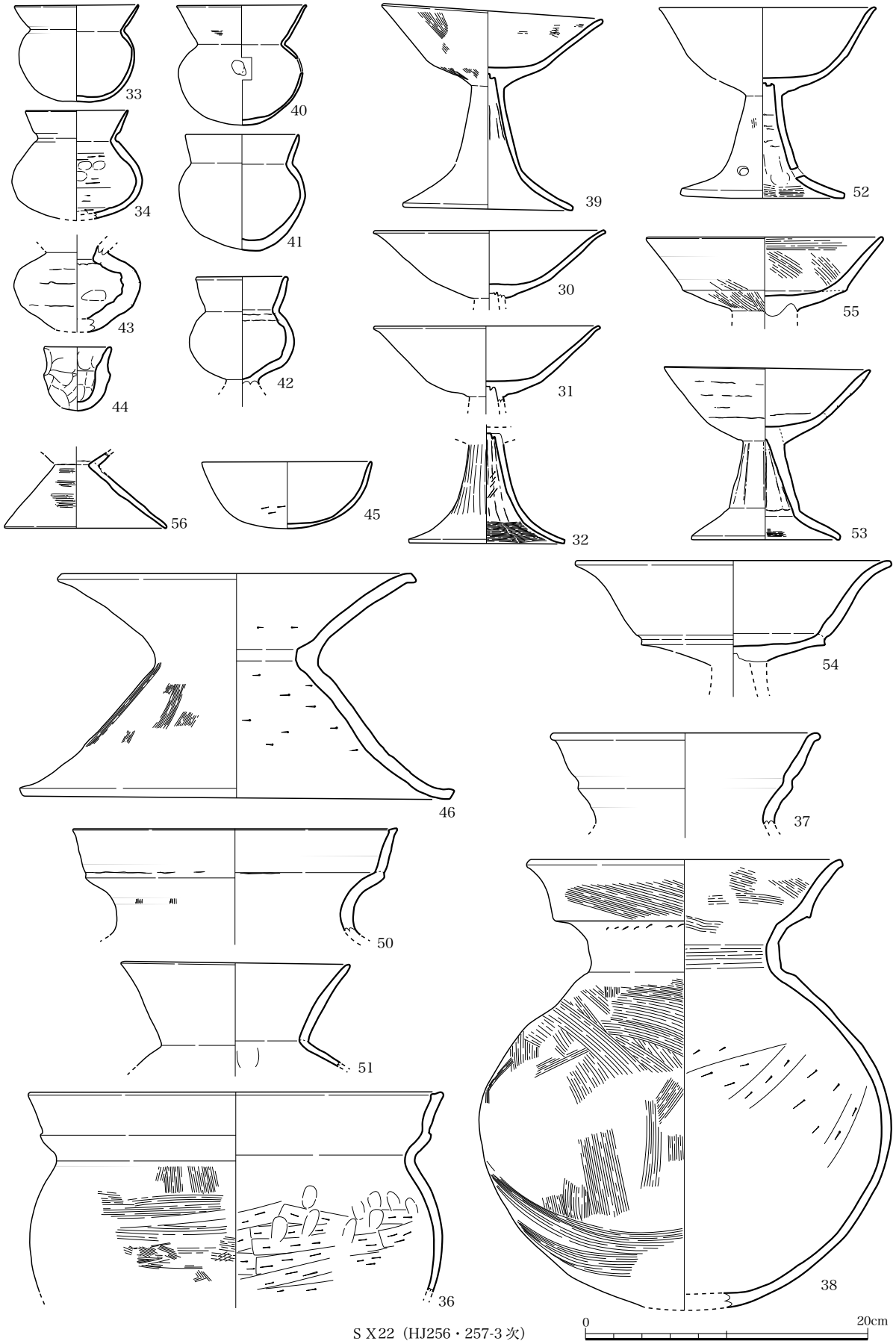



図 10　菅原東遺跡出土土器（1/4）（土器番号は（村瀬 2016）の観察表に対応）

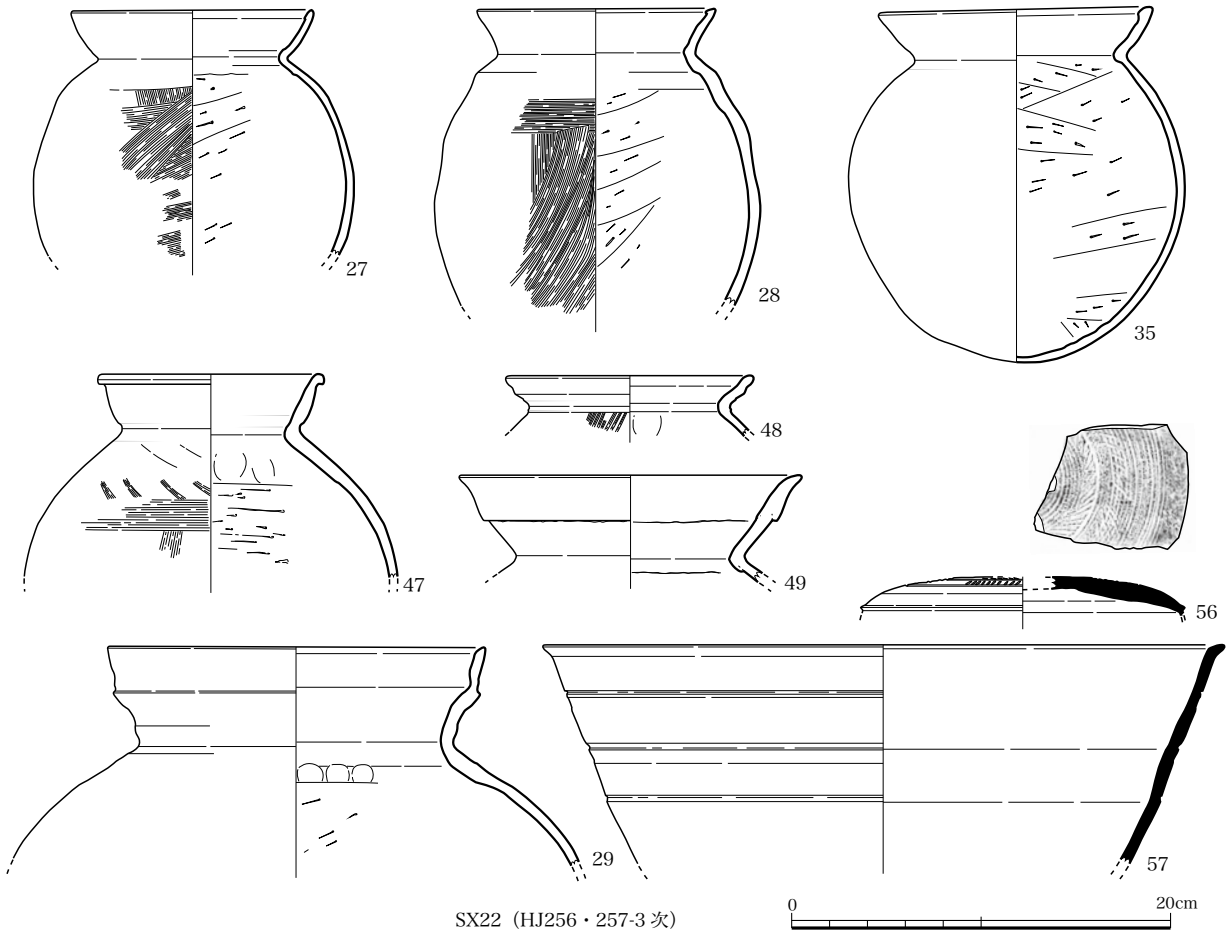



図 11　菅原東遺跡出土土器（1/4）（土器番号は（村瀬 2016）の観察表に対応）

小型器台は中実のものに加え、X 字状のものがあり、ヨコミガキが比較的密で胎土等も精製品である。高杯は杯部と受部の稜が明瞭で、ヨコミガキを施す。壺では、二重口縁壺で加飾のあるものやヨコミガキを施す精製品を含む。また、精製の直口壺を含む。広口壺は比較的多様な形態があり、編年の指標を現状見出し難い。甕は、伝統的第Ⅴ様式系のタタキ甕がわずかながら残存し、庄内系統の口縁部処理をするものも含むが、典型的な布留甕が主体である。ほかに、吉備・山陰・東海系の外来系土器を含むが、いずれも在地の胎土であるものが多い。

大和地域における小型丸底鉢の口縁部の発達、X 字状器台の出現は布留 1 式後半に求められ、精製の有稜高杯や加飾壺の残存、伝統的第Ⅴ様式甕の存在も、寺澤編年における布留 2 式に下らない根拠となる。ただし、寺澤編年における布留 2 式の基準資料には、器種構成の良好な一括資料に乏しく、なおかつ各器種で布留 1 式後半の特徴を継続するとされるものが多くある。したがって、ここではやや幅をもたせ、様相 2 は布留 1 式後半～布留 2 式と設定しておき、今後奈良市域の出土資料整理をふまえて再考したい。とくに豊富な器種構成である SB04 は、様相 2 の基準資料といえる。

様相 3　SE26・SB23 東土坑が該当する。小型丸底土器は、口縁部の発達する鉢を含まず、外面ハケ・内面ケズリ調整の壺が主体となる。高杯は、やや稜を残す個体があるものの、基本的に稜は消失して口縁端部がやや反る形状のものとなる。また、全体の調整はハケ調整が基調となる。菅原東遺跡としてはこの段階で杯がみられる。甕は口縁部が肥厚し肩部ヨコハケを施す布留甕のほか、口縁端部が肥厚しないものもある。

大和地域において精製小型丸底鉢から粗製小型丸底壺が主体となるのは、布留 3 式に位置づけられる。ハケ調整の高杯が主体となるもの、これに呼応するものであり、とくに SE26 は様相 3 の基準資料といえる。

様相 4　SB03 が該当する。小型丸底壺は、様相 3 の外面ハケ調整のものがわずかにあるが、主体はナデ調整のものとなる。器台は、中実で器壁の厚いナデ調整の器種が登場する。SB03 では 8 ～ 10 のように様相 2 で主体となる器種が図示した 3 点含むが、混入とはみられず、この段階でもわずかに含みうる状況であるとみられる。高杯は様相 3 と類似するが、口径に対して杯部が浅くな

表２　遺構別土器分類組成表

| | SX09 | SB07 | SB04 | SK23 | SE27 | SE28 | SK25 | SX06 | SE07 | SE26 | SB23 東土坑 | SD04 | SB03 | SE05 | SD24 | SX22 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 小型丸底土器 | ① | ② | ②③ | | ③ | ③ | | | | ④ | ④ | ④⑤ | ④⑤ | | ④⑤ | ④⑤ |
| 小型器台 | | ② | ①② | ① | | | | ③ | | | | ③？ | ②④ | | | ② |
| 有段口縁鉢 | ①？ | | ①② | | | | | | | | | | ② | | | |
| 高杯 | ① | ② | ② | | | | | | | ③④ | | ③④ | ④ | ④⑤ | ④⑤ | ③④⑤ |
| 杯 | | | | | | | | | | ① | | | | ② | | ① |
| 二重口縁壺 | | ②③ | ①②③④ | | | | | | | | | | | | | ③ |
| 直口壺 | | | ① | ② | | | ② | | | | | | | | | |
| 甕（外来系除く） | | ② | ②③？ | ③？ | | | | | ② | ③⑤ | ③？ | ③？ | ③⑤ | ④⑤ | ④⑤ | ④⑤ |
| 東海系 | | 甕 | 甕・壺 | 甕 | | 甕 | | | 甕 | | | | 甕 | | | |
| 山陰系 | | | 甕 | | | | | | | | | | | | | 甕、器台 |
| 吉備系 | | 甕 | | 甕 | | | | | | | | | | | | |
| 初期須恵器 | | | | | | | | | | | | | | | | 蓋、器台 |
| 様相 | 1 | 2 | | | 2～3 | | | | | 3 | | 3～4 | 4 | 5 | | 3～5 |
| 寺澤編年 | 布留１式 | 布留１式後半～２式 | | | 布留２～３式 | | | | | 布留３式 | | 布留３式～４式 | | 布留４式 | | |

る傾向がある。甕は、肩部ヨコハケを施す布留甕を含むものの、特異な形状の口縁部をもつ甕も含まれる。

大和地域において、小型丸底壺のナデ調整化は、これまであまり議論されておらず、概ね布留３～４式の範疇でとらえられている。新たな形態の器台の出現も含めて、菅原東遺跡のなかでは画期となる段階だが、今後周辺資料をふまえて既存編年と比較検討する必要がある。

様相５　SE05・SD24 が該当する。基本的な器種構成は様相４と同様であるが、新たに有稜の大型高杯が出現する。また、甕では肩部ヨコハケの布留甕が消失傾向にあるといえる。補足として SX22 では大型高杯に加えて初期須恵器が数点出土しており、概ね須恵器出現段階に併行するとみられる。様相４の SB03 上面を覆う包含層からも大型高杯が出土しており、実質的に様相４・５は同時期とみなせる可能性がある。

大和地域における大型高杯や初期須恵器の出現は、布留４式に位置づけられる。

## Ⅴ．菅原東遺跡の集落動態

以上で報告した土器類をもって、概ね現状における菅原東遺跡の主要な一括資料を提示した。以下では、菅原東遺跡の集落動態についての考察を行う。

ⅰ）既往の研究

菅原東遺跡については、岡田憲一（岡田 2011・2014）、中野咲（中野 2016）、筆者（村瀬 2016・2018）による検討がある。

岡田は、方形区画溝 SX22 とその周辺の区画溝の検討から、１～３期に区分した（岡田 2011）。この検討には橿考研が調査した溝 SD04・24・201・202 出土土器および、概要報告での SX22 出土土器を参考に行われており、第２期（布留３式）～３期（布留４式）の出土土器をもとにした検討に加え、概要報告での文章表記を頼りに、第１期を SX22 設営期として設定した。SX22 出土土器を廃棄年代とみて、その設営年代を遡って設定した点は先見である。その後、これらをまとめ直した後稿（岡田 2014）があるが、基本的には同様の概念に基づき、新たにⅠ～Ⅳ期に段階区分を行った。ただし、いずれもその初期段階の設定は、出土土器が未報告であることから、状況証拠的仮説であり、資料報告が望まれた。

そこで筆者は、岡田の指摘した方形区画溝 SX22 とそこに重複する井戸等の出土土器を報告した（村瀬 2016）。その結果、SX22 からは既往の認識通り布留３～４式段階の土器が主体であり、それを如実に示す大型高杯や初期須恵器の存在を提示した。一方、これに重複する井戸等の遺構のうち、SE27 や SE28 では、口縁部の発達する小型丸底土器が出土しており、SX22 の設営期の状況をより示すとみられるこれらの遺構では、布留２式段階まで遡りうる実態を提示した。

中野は、菅原東遺跡を含めた秋篠川流域の集落動態を検討するなかで、菅原東遺跡は岡田の見解を追認し、秋篠川東岸が布留１式段階に開発が始まることをふまえて、段階的な開発状況を示唆している（中野 2016）。

以上のように、検討は進められつつあるものの、出土資料の報告がないことから、踏み込んだ検証に至れてい

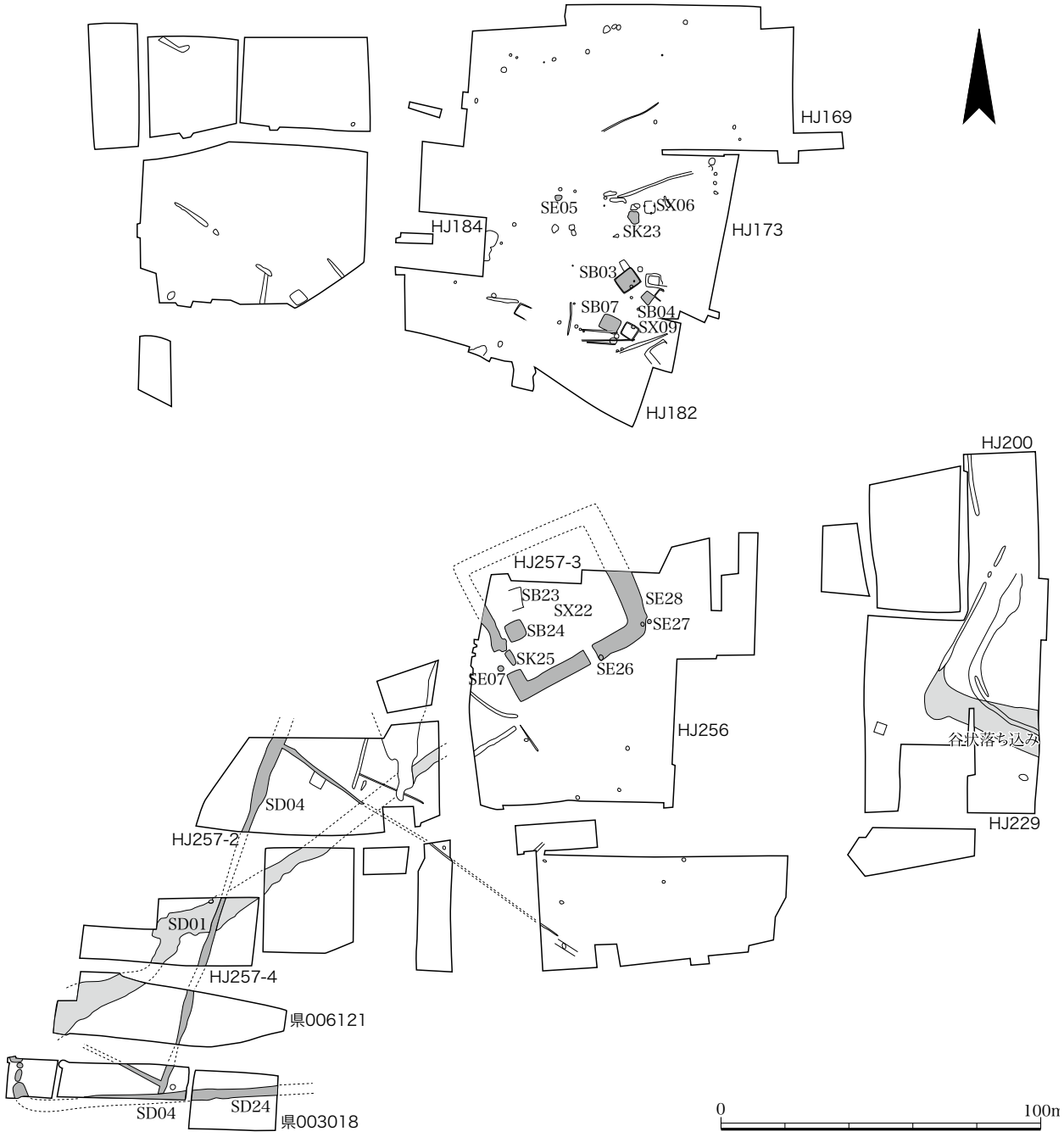



図 12　古墳時代前期における菅原東遺跡の遺構配置（1/700）

ないことが読み取れる。筆者自身が提示した SX22 と周辺出土土器についても、出土量が少なく時期を遡らせることに対し慎重にならざるを得なかった。

ⅱ）出土土器からみた遺構変遷

既往の研究をふまえて、本稿では菅原東遺跡の中心部とみられてきた方形区画溝 SX22 の北側に位置する竪穴建物・土坑群出土土器の報告を行った。その結果、SB04 では確実に布留 1 式後半～ 2 式に遡る一括資料を確認し、菅原東遺跡の開発がこの段階まで遡ることが明らかとなった。以下では、これらをもとにして遺構変遷を段階ごとに確認したい。

第 1 期：萌生期（布留 1 式後半段階）

菅原東遺跡における竪穴建物・土坑群が多く検出された HJ 第 169・173・182・184 次調査の発掘区では、弥生時代中期の方形周溝墓を検出しており、集落としてはこの時期にすでに開発されている。しかし、その後の竪穴建物・土坑群は方形周溝墓と重複する形で開発されているため両者の関連性はなく、古墳時代になってからある契機をもってここに集落が開発されたとみてよい。

開発時期は、SB04 出土土器から布留 1 式後半段階とみられる。土器編年上、これよりやや古い様相を示す SX09 は、SB08 内の小土坑であり、SB08 は SB04 より

やや古い可能性があるが、少なくともこれまでの認識よりさらに遡る布留１式段階に集落開発が始まることがわかる。方形区画溝 SX22 および周辺出土土器は、これらより新しい様相であり、竪穴建物群が造営されはじめる段階に、方形区画溝は未掘削であったとみられる。

第２期：開発期（布留２式段階）

集落の中心部とみられる方形区画溝 SX22、およびそれに接する井戸等が構築される。第１期では竪穴建物等がベースキャンプのように営まれているのみであったが、方形区画溝の掘削は首長居館としての体裁を整備したと評価できる点で画期である。方形区画溝の周辺にも区画溝が交差するように掘削されるが、一部はこの段階に整備が始まったと考えられる。

竪穴建物・土坑群では良好な器種構成をもつ一括資料がこの段階に見当たらない。SX06 は SB01 内の小穴であるが、第１期に比べて粗雑化した小型器台が出土しており、引き続き居住空間としての機能は継続されているとみられる。

第３期：盛行期（布留３式段階）

方形区画溝周辺の区画溝を含めてほとんどの集落整備が完了する段階とみられる。区画溝等の出土遺物は、概ね布留３～４式に位置づけられるものが主体を占め、若干布留２式に遡るものが含まれる状況から、この段階が最も集落として盛行した段階と考えることができる。

竪穴建物・土坑群においても SB03 などの遺構が存在し、第１期から竪穴建物が継続する状況を示す。

第４期：廃絶期（布留４式段階）

方形区画溝 SX22、区画溝 SD04・24 等、竪穴建物・土坑群の井戸 SE05 からは、布留３～４式の土器が埋没年代を示しており、上述した竪穴建物 SB03 も上面を覆う埋土から大型高杯が出土している点からみても、各エリアでこの段階に廃絶する状況がうかがえる。

SX22 では初期須恵器が出土しているが、菅原東遺跡全体でみればほとんど出土はなく、布留４式の比較的早い段階に集落としての機能が失われたとみられる。

ⅲ）佐紀地域としての評価

従来、菅原東遺跡出土土器として報告されてきた遺構は、方形区画溝 SX22・井戸 SE26、区画溝 SD04・24 であった。これらの土器はいずれも布留３式以降に位置づけられるもので、集落の主要な時期を示すものとして評価されてきた。その後、岡田憲一や筆者による補足によって、布留２式段階まで遡りうる可能性を指摘してきた。

しかし、本稿で検討してきたように、菅原東遺跡の中心部（方形区画溝 SX22 等）の開発は布留２式段階であるものの、北側に隣接する竪穴建物・土坑群、つまり菅原東遺跡としての開発は布留１式段階に遡ることが明らかとなった。したがって、秋篠川流域としてみた場合、これまで段階的開発であると評価されてきたが、ほぼ同時期に菅原東遺跡・山陵町遺跡が開発されはじめるものと再評価できる。このことは、佐紀古墳群との関連を検討する上でも重要な集落動態と位置づけ得る。

## Ⅵ．菅原東遺跡と佐紀古墳群

菅原東遺跡については、約 500m 南に位置する宝来山古墳との関連が指摘されてきた（岡田 2011・村瀬 2018）。集落と遺跡の時期や位置関係からみても妥当であり、本稿でも対比検討した山陵町遺跡は佐紀陵山古墳を含む佐紀古墳群西群に関連するものとみてよかろう。以下では、このことについて、古墳出土埴輪等と集落出土土器の比較検討から、その妥当性を示したい。

ⅰ）埴輪編年からみた古墳変遷

佐紀古墳群をはじめとする大型古墳群は、陵墓に治定されており、副葬品が不明確である場合が多い。ただし、埴輪については宮内庁による報告等で、若干ながら様相が全体を通して把握できる。以下では、埴輪から大型古墳の前後関係を概観する。

佐紀陵山古墳では、形象埴輪がいくつか知られている。なかでも、蓋形埴輪は肋木を有し、笠部を立体表現するもので、立ち飾りも最古段階の表現である（小栗 2007）。円筒埴輪は良好な資料に恵まれないが、補完資料として、北東側に位置するマエ塚古墳出土埴輪がある（奈良県教育委員会 1969）。黒斑を有する鰭付円筒埴輪で、底部高が突帯間隔の２倍で割り付けられたものや口縁部高が低いものが含まれ、埴輪編年Ⅱ期のなかでも古相に位置づけられる。

佐紀石塚山古墳は、佐紀陵山古墳の西側に接する前方後円墳で、東側周濠が極端に狭く、佐紀陵山古墳に規制されたことが原因と考えられることから、それに後出するとみられる。出土埴輪は段数構成等がわかるものはないが、鰭付円筒埴輪や柵形埴輪、蓋形埴輪の笠部が立体表現であるものを含む（宮内庁書陵部 1996・1997）。時期を特定するのは困難であるが、埴輪編年Ⅱ期のなかでおさまる可能性がある。

宝来山古墳では、これまで埴輪の様相が不明確であったが、加藤一郎による資料報告がなされている（加藤 2012）。それによると、口縁部高 8cm 程度の黒斑を有する円筒埴輪があり、形象埴輪では笠部を立体表現する

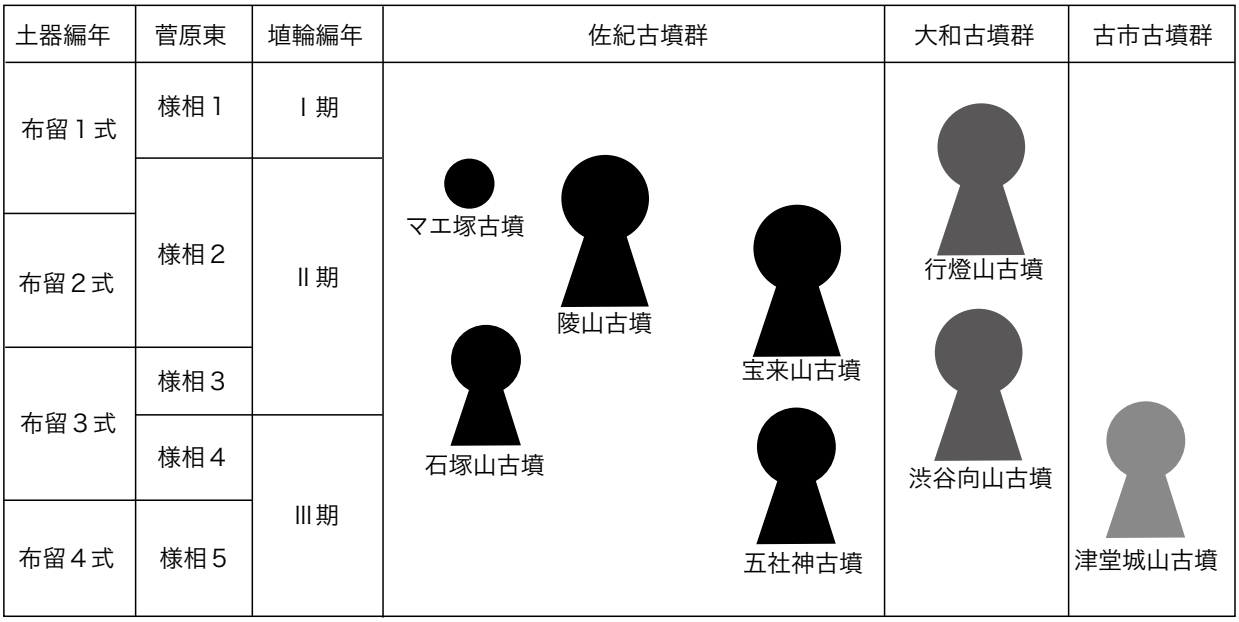



図 13　菅原東遺跡の動態と佐紀古墳群

蓋形埴輪や靫形埴輪の出土が報告されており、埴輪編年Ⅱ期に位置づけられている。

五社神古墳は、墳丘裾の調査が行われ、黒斑をもち二次調整ヨコハケに静止痕のない円筒埴輪が出土している（宮内庁書陵部 2004）。鰭付円筒埴輪も存在するが透孔は円形のものが多く、若干方形のものもある。また、形象埴輪では蓋形埴輪の笠部が線刻表現であるものが出土している。B 種ヨコハケの個体が現状みつかっていないことから、埴輪編年Ⅱ期の範疇であるが、笠部が線刻表現の蓋形埴輪や籠目土器が共伴するのは、Ⅲ期に下る場合が多いことから、時期的に下る可能性を考慮すべきであろう。

以上からみると、佐紀古墳群ではとりあげた４つの古墳がいずれも概ね埴輪編年Ⅱ期の範疇にあり、立地的にみて佐紀陵山→佐紀石塚山古墳、蓋形埴輪や籠目土器の出土からみて、佐紀陵山→五社神古墳であろうと考えられる。宝来山古墳では靫形埴輪が出土しており、佐紀陵山古墳では現状知られていないことから、佐紀陵山→宝来山・佐紀石塚山→五社神古墳の変遷を想定する。

ⅱ）土器との併行関係

上述した４つの古墳からは、築造時期に関わる古式土師器が出土していない。したがって、他地域の大型古墳群との関連を考慮して併行関係を検討する。

大和古墳群では、行燈山古墳と渋谷向山古墳が検討対象となる。行燈山古墳では東側の外堤斜面葺石から小型丸底鉢が出土している（宮内庁書陵部 1976）。口縁部がやや発達するものの、口縁部高＝体部高となるもので、布留１～２式の範疇で検討できるものである。埴輪は良好な資料が見当たらないものの、隣接する櫛山古墳では定型化以前の鰭付円筒埴輪や柵形埴輪が出土しており、埴輪編年Ⅰ–5 期に位置づけられる。

渋谷向山古墳は、宮内庁の調査によって埴輪が確認されており、円筒埴輪は黒斑をもち円形透孔を主体とする（大阪市立大学日本史研究室 2010、宮内庁書陵部 2017）。B 種ヨコハケはなく墳丘に配置されたものの多くは鰭のないものであったと考えられる。形象埴輪でも蓋形埴輪は笠部が線刻表現のものであり、靫形埴輪の出土もみられる。出土土器は前方部周辺から出土しており、口縁部の発達する小型丸底鉢等があり、概ね布留１式後半～布留２式に位置づけられる（宮内庁書陵部 1974）。ただし、これらの土器が墳丘構築前後のいずれを示すかは不明確である。

また、補足として古市古墳群で最古段階にあたる津堂城山古墳では、B 種ヨコハケの埴輪が少量出土することから埴輪編年Ⅲ－１期に位置づけられるが、蓋形埴輪の型式は五社神古墳と同一のものであり、概ねこれらは同時期としてみることができる。

津堂城山古墳外濠の堆積土からは外面ハケ・内面ケズリ調整で口縁部＜体部となる粗製小型丸底壺や、肩部ヨコハケを残す布留甕が出土しており、概ね布留３式の特徴といえる（藤井寺市教育委員会 2013）。内堤外側斜面からは TK73 ～ 208 型式の須恵器が出土しており、以上をふまえても、概ね布留３～４式にかけて外濠の初期堆積があったとみてよかろう。

以上をまとめると、大和古墳群では埴輪からみて行燈山古墳（Ⅰ－５期）→渋谷向山古墳（Ⅱ－２期）であり、

土器併行関係としては補完資料を含めて、行燈山古墳（Ⅰ－５期：布留１式後半）→佐紀陵山古墳（Ⅱ－１期）→宝来山古墳（Ⅱ－１～２期）→渋谷向山古墳・佐紀石塚山古墳（Ⅱ－２期：布留２式後半）→五社神古墳・津堂城山古墳（Ⅲ－１期：布留３式）と考えられる。

ⅲ）菅原東遺跡の動態と宝来山古墳

最後に、改めて菅原東遺跡と宝来山古墳の関連をまとめる。宝来山古墳の築造時期は、埴輪編年Ⅱ－１期に対応する良好な出土土器がないものの、前述の検討により概ね布留１式後半～布留２式前半段階にあたると想定することができた。これをもとに、先に提示した菅原東遺跡の時期区分と比較し、その動態を検討する。

宝来山古墳の築造開始は、概ね布留１式後半～布留２式前半段階のなかで考えられる。これは菅原東第１～２期にあたり、方形区画溝は未整備で、竪穴建物・土坑群が造営され始める時期と概ね合致する。つまり、宝来山古墳の築造開始と菅原東遺跡の開発開始時期が一致する。この段階における菅原東遺跡の様相は、竪穴建物がいくつか存在する程度であり、その存続時期幅も、土器型式でいう一型式分に満たない。だからこそ、竪穴建物ごとの土器様相に一括性が認められるのである。したがって、これらの竪穴建物は、宝来山古墳築造のための仮設キャンプとみることができる。

次に、宝来山古墳の築造が完了する布留２式段階は、菅原東第２期に相当する。この段階になると、方形区画溝などによる区画が整備され、全国的にみられる古墳時代の首長居館としての整備がはじまる。

また、この時期の大型前方後円墳の多くは、一般的に寿陵と考えられることから、菅原東第３期は、宝来山古墳での埋葬が完了した直後の段階に相当するとみられる。この時期には、菅原東遺跡の整備が完全に完了しており、集落としての最盛期を迎えている。

菅原東第４期は、一斉に遺構が廃絶し、集落としても以後古墳時代後期に至るまで遺構がみられなくなる。

つまり、宝来山古墳の築造開始とともに集落が成立した菅原東遺跡は、そこでの埋葬が完了してほどなく廃絶するという様相を示す。つまり、菅原東遺跡は一般的な生活集落とは異なり、宝来山古墳の築造および、その被葬者の動態に関わる集落遺跡であると評価できる。

## Ⅶ. おわりに

本稿では、HJ 第 169・173・182・184 次調査出土土器の再整理報告を行い、これまで報告されてきた菅原東遺跡出土土器をあわせて、遺跡内での土器編年を行なった。これをもとに集落動態を４時期区分した。

また、佐紀古墳群をはじめとする大型古墳群出土埴輪・土器からその変遷を明らかにし、菅原東遺跡に近接する宝来山古墳との関係を考察した。

その結果、菅原東遺跡は宝来山古墳の築造時期と消長をほぼともにすることがわかった。このことは、従来報告されてきた布留３～４式の土器類だけでは検証できなかったもので、再整理によって集落の時期幅が明らかになったことで、はじめて動態を検証できたといえる。

**引用文献**

大阪市立大学日本史研究室 2010『玉手山１号墳の研究』
岡田憲一 2011『平城京右京三条二・三坊　菅原東遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
岡田憲一 2014「奈良市菅原東遺跡の所謂「首長居館」とその周辺整備」『古墳出現期土器研究』２　古墳出現期土器研究会
加藤一郎 2012「垂仁天皇菅原伏見東陵採集の埴輪について」『書陵部紀要』64 宮内庁書陵部
宮内庁書陵部 1974「景行天皇山辺道上陵の出土品」『書陵部紀要』26
宮内庁書陵部 1976「崇神天皇陵外堤及び墳丘護岸区域の事前調査」『書陵部紀要』28
宮内庁書陵部 1996「狭城盾列池後陵整備工事区域の事前調査」『書陵部紀要』48
宮内庁書陵部 1997「狭城盾列池後陵整備工事区域の事前調査 - 第１トレンチの出土品 -」49
宮内庁書陵部 2004「神功皇后 狭城盾列池上陵墳裾護岸その他整備工事区域の調査および墳丘外形調査」『書陵部紀要』56
宮内庁書陵部 2017「景行天皇 山邊道上陵整備工事予定区域の事前調査」『書陵部紀要』68
寺澤薫 1986「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
中野咲 2016「奈良盆地北縁における弥生時代から古墳時代への集落動態の実態」『古墳出現期土器研究』４ 古墳出現期土器研究会
奈良県教育委員会 1969『マエ塚古墳』
奈良市教育委員会 1990「平城京右京三条三坊一坪の調査　第 169.173.182.184 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成元年度』
奈良市教育委員会 1992「菅原東遺跡の調査　第 200 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成３年度』
奈良市教育委員会 1993「平城京右京三条三坊二坪　菅原東遺跡の調査　第 256 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成４年度』
奈良市教育委員会 1994「平城京右京三条三坊二坪　菅原東遺跡の調査　第 257-3 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成５年度』
藤井寺市教育委員会 2013『津堂城山古墳—古市古墳群の調査研究報告Ⅳ—』
村瀬陸 2016「菅原東遺跡の首長居館出土土器—古墳時代前～中期における菅原東遺跡の研究Ⅰ—」『古墳出現期土器研究』４ 古墳出現期土器研究会
村瀬陸 2018「HJ229・443-7 次出土埴輪からみた菅原東遺跡と宝来山古墳 - 古墳時代前～中期における菅原東遺跡の研究Ⅱ -」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 27 年度』奈良市教育委員会
村瀬陸 2019「菅原東遺跡出土石見型埴輪の検討」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 28 年度』奈良市教育委員会